

すべての子どもたちの未来を拓く生き方探究教育 (キャリア教育) とはⅡ

— 小学校6年社会科, 中学校3年社会科の実践を通して —

子どもたちが「生きる力」を身につけ、社会の変化に流されることなく、自立していくことが大切であると考えます。生き方探究教育は、すべての教育活動を通して、子どもたち一人一人の生き方や進路と深く結びついている。そこで、すべての教育活動を生き方探究教育の視点に立って「一人の人間として、社会人として自立するために」子どもたちが自らの将来に関心を持ち、何事にも前向きに生きていくための力を整理し実践することが大切である。

本研究では、すべての教育活動のなかで、昨年度の研究で作成した「生き方探究教育の学習プログラム枠組み(例)」に基づいた「全体計画(例)」「学習プログラム(例)」を作成し、内容を整理し実践を通して研究を進めた。

目 次

はじめに……………	1	第2節 中学校3年の社会科学習を通して	
第1章 生き方探究教育導入にあたって		(1) 子どもたちの実態と	
第1節 生き方探究教育(キャリア教育)をめぐる背景		中学校3年の社会科の授業……………	19
(1) 生き方探究教育の現状……………	1	(2) 「一人の人間としてのわたしたち」の	
(2) 昨年度の研究成果から見えてくる京都市の実態	2	学習を通して……………	21
(3) キャリア教育の先行研究(例)……………	3	(3) 「一人の人間としてのわたしたち」	
第2節 生き方探究教育指導計画作成にあたって		の学習のアンケート結果から……………	22
(1) 共生と自立を柱とする		第3章 すべての子どもたちの未来を拓く	
5つの領域と17の力……………	3	生き方探究教育を進めるにあたって	
(2) 全体計画(例)作成にあたり……………	6	第1節 生き方探究教育と教育活動	
(3) 年間指導計画(例)作成にあたり……………	8	(1) 生き方探究教育と進路指導……………	25
第2章 生き方探究教育の視点に立った		(2) 本市教育活動のなかでの実践例……………	25
社会科学習の実践例		第2節 自己実現に向けたさらなる充実	
第1節 小学校6年の社会科学習を通して		(1) 自己実現に向けた生き方探究教育……………	27
(1) 子どもたちの実態と		(2) 成果と課題……………	27
小学校6年の社会科の授業……………	11	おわりに……………	28
(2) 「3人の武将」の学習を通して……………	12	付表……………	29
(3) 「3人の武将」の学習の		生き方探究教育の年間指導計画(例)	
アンケート結果から……………	17	小学校6年・中学校3年	

<研究担当> 巻野 恭明 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究協力校> 京都市立養正小学校・大宅中学校

<研究協力員> 新田 淳 (京都市立養正小学校教諭)
片山 雅斗 (京都市立大宅中学校教諭)
森下 治樹 (京都市立大宅中学校教諭)

はじめに

昨年度、実施したキャリア教育に関する教職員対象の意識調査から「キャリア教育の必要性は感じるが、どう取り組めばよいか分からない」「どのように子どもたちに夢を持たせるか、指導の仕方がわからない」などの声が上がっていた。そして、子どもたちへの調査の結果から「自分が将来どう生きるか」「夢の実現には何をすべきか」などのように、自らの将来像にとまどいや不安を持つ子どもたちの姿が見られた。

また、小・中学校において、学校は「楽しい」と思っている子どもたちは多いが、その反面「なぜ勉強するのか」「勉強したことが役立つのか」など学ぶことに関わって疑問を感じたり目標を失ったりしている子どもたちが多いことがわかった。こうした課題を解決するためにも、生き方探究教育に取り組むことで、学習意欲の向上を図り、将来展望を持った子どもたちを育てたいと考える。

昨年度本市教育委員会の「地域との関わりのなかで生き方を考え、生きる力をはぐくむ『生き方探究教育』（試案）」（以下 生き方探究教育（試案）とする）では、「キャリア教育の範囲と内容は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などにおける、すべての教育活動である」(1)と示した。

生き方探究教育を進める基盤は、これまで本市が進めてきた「一人一人の子どもを徹底的に大切に」する教育である。すでにこれまでの学校での教育活動のなかで、子どもたちの発達に関わる内容は、たくさん取り組まれてきた。

生き方探究教育で育てたい力は、発達とともに自然に形成されるものではないと考えると、どのように育てていくのが大切になる。その意味では、生き方探究教育は新たな分野で何か特別なことに取り組むのではなく、今までの教育活動を生き方探究教育の視点に立って、すべての教育活動のなかで、取り組むべき内容を整理し有機的に実践することが大切であると考え。また、地域や社会、家庭における様々な経験や体験においても、生き方探究教育は重要な意味を持つことを考え、計画的に取り組むことも必要である。

そこで、本年度の研究では、教育活動のなかで、取り組むべき内容を整理し実践することを通して、昨年度の研究で作成した「生き方探究教育の学習プログラム枠組み（例）」を基にした「全体計画（例）」「学習プログラム（例）」を作成することに

した。そして、小・中学校の授業実践を通して子どもたちの変容を基に成果と課題を報告する。

第1章 生き方探究教育導入にあたって

第1節 生き方探究教育（キャリア教育）をめぐる背景

（1）生き方探究教育の現状

平成11年12月中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」（いわゆる接続答申）では、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観、勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせると共に、自らの個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」(2)と示している。このように、学校におけるキャリア教育の導入・実施が急務の課題となっている。

それを受けて文部科学省は、平成16年に初等中等教育におけるキャリア教育の基本的な方向などについて総合的に検討し、その結果を「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」で示した。報告書では、キャリアを「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖」とし、キャリア教育は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」(3)と述べている。

さらに、キャリア教育との関わりについての位置づけは、中学校の学習指導要領では「進路指導」について「現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成すること」(4)と示している。また「望ましい職業観・勤労観の形成、主体的な進路の選択と将来設計」(5)とも示している。一方、小学校では「進路指導」という用語は用いられていない。小学校学習指導要領総則では、「生き方」という言葉を用い「各教科などの指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自己の将来像考えたりする機会を設けるなど工夫すること」(6)とされている。小学校段階から自らの将来の生き方について考えさせる指導が必要であることは明らかであり、その点を考慮して、指導にあたらなければならないと考える。

平成17年2月に、本市では、キャリア教育について「子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立つとき、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの取組は有機的に関連づけられ、全体として体系的な取組である」(8)と示している。

そして『地域・社会との関わりのなかで生き方を考え、生きる力をはぐくむ』キャリア教育の推進を目指し、その名称をキャリア教育京都市スタンダード『生き方探究教育』とし、個としての自立や他との共生を促す視点から、幼稚園から高等学校にわたる発達段階をふまえたキャリア発達を支援する学習プログラムを構成することとした(9)と位置づけた。

本市において、これまで進めてきた教育の基本理念は、「一人一人の子どもを徹底して大切に育てる」(7)教育を一貫して進めることであり、個に応じたきめ細かな学習指導を通して確かな学力を身につけさせ、すべての子どもたちの進路保障を図ることを大切にしている。その実現に向けては、保護者・地域の協力を得ながら地域ぐるみで推進し、子どもたちが将来の生き方と結びつけて知識や技能を活用する教育活動を展開することが必要である。また、身近な社会である学校や家庭、地域は子どもたちの重要な学習と体験の場である。今、学校や家庭、地域に求められているのは、共にその役割を果たしながら連携・協力し、地域ぐるみで子どもたちの確かな学びと豊かな育ちを実現することである。

生き方探究教育の取組は、はじまったばかりであり、教科との関連や生き方探究教育の在り方については、多様な考え方や意見がある。そこで、すべての教育活動を通して生き方探究教育の取組が進められることが求められている。

(2) 昨年度の研究成果から見えてくる京都市の実態

昨年度、教職員と子どもたち(小学校3年・6年・中学校3年)を対象に、キャリア教育についての意識調査をおこなった。そのなかで、特に顕著な結果が出たものを以下にあげてみる。

教職員を対象にした意識調査で「キャリア教育は必要だと思いますか」(図1-1)の回答結果をみると「必要だと思う」「ある程度は必要だと思う」と回答した割合を合わせると小学校では81%、中学校では89%であった。

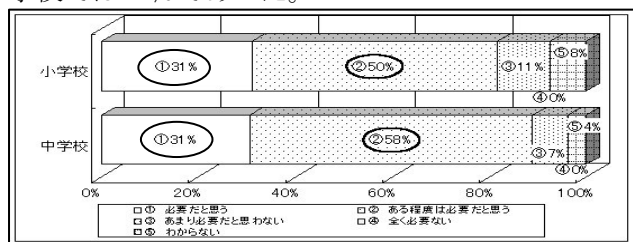


図1-1 あなたはキャリア教育が必要だと思いますか
また、「あなたは、キャリア教育の内容はどのよ

うなものが多いと思いますか」(複数回答可)では、小学校では「体験学習を重視する教育」との回答が65%と最も多かった。

中学校では「仕事や職業についての情報を得る学習」との回答が69%と最も多く、続いて「体験学習を重視する教育」との回答が67%であった。その他には、「自分の個性・特性・適性などを知る学習内容が必要」「自分を知る学習が重要である」の回答が続いた。

次に、教職員を対象にキャリア教育推進についての意見や感想、疑問などについて尋ねた。すると「キャリア教育の情報の提供してほしい」「マニュアル本」や「カリキュラム」がほしいなどのように、キャリア教育の進め方に関する情報提供を求める声が多くあがった。

子どもたちを対象にした意識調査で「あなたは夢を持っていますか」(図1-2)の回答結果をみると「はっきりした夢を持っている」「あこがれの夢がある」と回答した子どもたちを合わせると、学年進行とともにその割合が少なくなっていることがわかる。

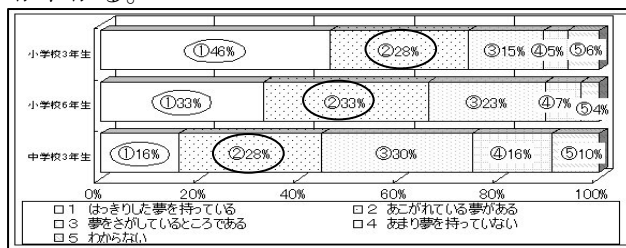


図1-2 あなたは夢を持っていますか

また中学校3年の回答結果をみると「夢をさがしているところである」「夢を持っていない」と回答している割合が小学校より多いこともわかった。

次に、「あなたは夢の実現のために努力していますか」の回答結果をみると、小学校から中学校へと学年進行とともに「努力している」と回答した割合が、小学校3年では51%であったが、中学校3年では15%と少なくなっている。中学校3年では「どちらかといえば努力していない」「あまり努力していない」の回答を合わせると65%であった。

「あなたは夢を持っていますか」(図1-2)の回答結果で、「はっきりした夢を持っている」「あこがれの夢がある」と回答した子どもたちに「夢の実現に向けて努力しているか」と尋ねたところ、小学校3年では、90%の子どもたちが「努力している」と答えた。しかし、中学校3年では49%で、その割合は小学校に比べて少なかった。

同設問で、「夢をさがしているところである」「夢を持っていない」と回答した子どもたちに「夢の

実現に対して努力しているか」と尋ねたところ、小学校3年では、61%の子どもたちが「努力している」と答えた。しかし、中学校3年では31%で、その割合は小学校に比べて少なかった。そして、中学校3年では、「夢を持っていない」と回答した子どもで「努力もしていない」と回答した子どもは69%であった。

また、学年進行とともに「夢を持っていない」と回答し、夢の実現のために「努力していない」と回答した子どもたちの割合が多くなっていることがわかった。特に、「夢を持っていない」と回答し、夢の実現のために、「努力していない」と回答している中学生が69%いるという実態が明らかになった。

以上のように、昨年度の意識調査の結果をみると、教職員の多くはキャリア教育の必要性は感じているが、その内容についてはあまり浸透していないことが明らかになった。そのため、何をどう取り組みればよいかのわからないという現状がうかがえた。

また、子どもたちの意識調査の結果からは、学年進行とともに、「将来展望」を考える上で、生き方探究教育の目指している、一人の社会人として自立するために育てたい力がつきにくくなっていることがうかがえた。そのため子どもたちは「今何を考え、何をなすべきか」が見えにくくなっているのではないと思われる。

(3) キャリア教育の先行研究(例)

そこで、生き方探究教育を学校で実践をするにあたり、キャリア教育の先駆的な研究をあたってみた。ここでは、先駆的に取り組まれてきた先行研究実践の一部をあげる。

滋賀県総合教育センターの飯田は、平成16年度・17年度と「夢や希望をはぐくむキャリア教育の展開」をテーマに取り組み「キャリア教育を進めていく際には、学校の教育活動全体を通しておこなうことが基本である、指導計画は、各教科、道徳、特別活動および総合的な学習の時間のそれぞれについて作成されるべきものである」(10)と示している。指導重点として「夢や目標をもつ」「自分を知り伸ばす」「働く価値に気づく」「職業を知る」の4項目を設定し、小学校におけるキャリア教育の学年目標や年間指導計画を作成し、さらに小・中学校を一貫したキャリア教育のカリキュラムを作成している。また、小・中学校を一貫した系統的な指導の必要性から、中学校でおこなわれる職

場体験学習の実践を通して、望ましい勤労観・職業観を身につけるための取組がなされ、各学校での進め方がまとめられている。

次に千葉市教育センターの、平成17年度研究の反町は「夢をかなえる小学校からのキャリア教育」で「キャリア教育を『生き方学習』の中核に据え、子ども一人一人が、人と人、自然や社会とのつながりやかかわりを大切にしながら、自分を好きになり、生きることに前向きになるための教育活動」(11)ととらえモデルプランを作り、子どもたちの発達課題に合わせた単元づくりをおこなった。

また、愛知県犬山市立犬山南小学校では「夢を持ち、仲間と学び合うなかで、自分を拓く子—自分づくり、仲間づくりをはぐくむキャリア教育—」をテーマに取り組んでいる。そこでは、小学校における各教科や道徳・特別活動などのキャリア教育の実践がなされた。報告書には「各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などのある特定の時間の枠があるわけではなく、既存の教科・領域で全領域にわたって機能的な役割をはたしているものである」(12)と示している。これはキャリア教育の視点でカリキュラムを見直し、子どもたちの生き方を支援する試みである。

ここで紹介した先行的に実践している学校は、子どもたちに「自分の将来に対する夢」を持たせることができ「生きる力」をはぐくむ取組であったと報告している。

そこで、以上の実践研究の成果を受け、本研究では、生き方探究教育を、すべての教育活動を通して、生き方探究教育の視点に立って整理し、全体計画(例)や年間指導計画(例)を作成することにした。

第2節 生き方探究教育指導計画作成にあたって

(1) 共生と自立を柱とする5つの領域と17の力

キャリア教育を推進するにあたって、平成16年度に、協力者会議報告書では、子どもたちの発達段階において身につけることが期待される能力・態度を「勤労観・職業観をはぐくむための学習プログラムの枠組み(例)」(13)として示した。そして「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意志決定能力」の4領域8能力において大切にしたい子どもたちの姿を示した。(表1-1)

生き方探究教育は「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」ことを基本ととらえ、学校におけるすべての教育活動や家庭、地域での活動とともに進

めていくことが大切である。

表1-1 協力者会議報告書の4領域と8能力

4領域	8能力
「人間関係形成能力」 他者の個性を尊重し、自らの個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む	自他の理解能力 コミュニケーション能力
「情報活用能力」 幅広く情報を活用し、身近な職業に興味を持って自らの生き方に生かす	情報収集・探索能力 職業理解能力
「将来設計能力」 夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実をふまえながら、前向きに自らの将来を設計する	役割把握・認識能力 計画実行能力
「意志決定能力」 自己の意思と責任でよりよい選択・決定をおこなうとともにその過程での課題や葛藤に積極的に取り組む	選択能力 課題解決能力

生き方探究教育を推進するにあたっては、筆者が昨年度実施した意識調査の結果から、個としての自立や他者との共生を促す視点に立って、幼稚園から高等学校にわたる発達段階をふまえ、子どもたちを支援する必要があると考えた。

そこで、本市が従来から大切にしてきた「共生と自立」を柱に、人や社会と共に生き、自らの生き方を考え、個としての自立を促すように考えた。また「領域と能力」を本市の子どもたちの実態にあった形で、より明確にし、よりわかりやすくなるように、学習プログラムの枠組み例を「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」キャリア教育の推進を目指し「共生と自立を柱とする5つの領域と17の力の学習プログラム枠組み(例)」(14)に組分けて、生き方探究教育において大切にしたい子どもの姿を提案した。(表1-2)

作成にあたっては、協力者会議報告書が、小、中、高等学校の段階において身につけることが期待される能力・態度を示した「勤労観・職業観をはぐくむための学習プログラムの枠組み(例)」(15)を参考にした。

小学校における生き方探究教育では、小学校の発達段階を「勤労観の基盤形成の時期」と位置づけている。「学習プログラム枠組み(例)」では、発達課題を1・2年では「自分の役割に興味を持つ」とし、3・4年生では「自分の役割に責任を

持つ」「身近な地域に様々な仕事があることを知る」と示している。また、5・6年では「自己を見つめ将来の夢のイメージをつくる」「働くことの大切さや苦勞・喜びを知る」(16)と示している。

子どもたちは、学年が進むにつれて、個性を大切にし、一人一人にあった力を育てる必要があると考える。子どもたち一人一人を大切にしつつ、集団としての役割も大切にし、「人と共に生きる力」「社会で共に生きる力」などをはぐくむことが大切である。そして、学年進行とともに働くことへの関心や将来の夢を持たせることが大切であると考えた。

次に、中学校における生き方探究教育では、これまでの中学校の進路指導をさらに発展させていく必要があると考えた。中学校の発達段階を「職業に対する現実的探索の時期」と位置づけ、学習プログラム枠組み例では、発達課題を「自分自身の将来の夢や課題を見つけ、様々な体験に取り組み、将来の夢や職業についての関心・意欲を高める」(17)と示した。そして、子どもたちが進学や就職することの意味を考え、一人一人の興味や関心などに基づく進路計画の立案と情報を入手して理解を深めることにした。子どもたちが、自覚を持って進路選択できるように、自らの生き方について探索活動をおこなうための取組が大切であると考えた。

生き方探究教育は、学校と家庭や地域・社会との結びつきを持ち、様々な人々と様々な経験や体験にふれ、豊かな人間性を培い、自己や他者のよさを知り、一人の社会人としての自立を目指している。そして、子どもたち一人一人に生活のなかで、自らの将来について考えさせるとともに、社会のなかで「生きる力」を培い、主体的に自分の生き方を選択決定できる力をはぐくむ教育であると考えた。こうした考え方で、生き方探究教育をとらえることで、生き方探究教育は、人が生まれたときから始まり、成長とともに進めることが大切であると考えた。そして、様々な人とのふれあい、自分の将来について考え、支援を受けながら、将来像をふくらませる教育であると考えた。(図1-3)

そこで、すべての教育活動を通して「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」ことを考え、社会性や自立心の向上など「子どもたちを一人の社会人として自立させるため」の学校での生き方探究教育の全体計画(例)や各学年の年間指導計画(例)を作成していかなければならないと考えた。

表1-2 生き方探究教育の5つの領域と17の力において大切にしたい子どもたちの姿

5つの領域		17の力
共 生	<p>(1) 「人と共に生きる力」 (人間関係形成能力)</p> <p>他者の個性を尊重し、自分の個性を 発揮しながら、様々な人々とコミュニ ケーションを図り、協力・共同してもの ごとに取り組むとともに、世界に視野を 広げ、ものごとに取り組む力</p>	<p>①【自分と他者を理解する力】 自らのよさを知ることで、自ら理解を深めるとともに、他者の多様な個性を理解し、共 感・感動し、お互いに認め合うことを大切に行動していく</p>
		<p>②【コミュニケーションを豊かにする力】 多様な社会生活のなかで、豊かな人間関係やコミュニケーションを築きながら、自らの 考えや他者の考えをお互いに伝えながら成長していく</p>
		<p>③【世界に視野を広げる力】 世界にも視野を広げ、英語をはじめ外国語を使って、お互いが意思や感情、思考伝 達し合うことの大切さを知り積極的に世界の国々を理解するとともに人間関係を築く</p>
	<p>(2) 「社会で共に生きる力」 (社会参画能力)</p> <p>保護者・地域との連携を深め、生き 方に関わる活動を共に高め合い、自らが 生活する地域でのふさわしい生き方、地 域や社会への貢献や生きていくために必 要な事を関連づけ、ものごとに取り組む 力</p>	<p>④【地域と共に生きる力】 地域の実態や歴史・伝統・産業の果たすべき役割や自らが地域で生活し、生きてい くために必要な事を明確にし、自分自身にふさわしい生き方と地域・産業界への連携を はかる</p>
		<p>⑤【集団に適応し共に生きる力】 学級や学校・様々な集団などの関わりの中から、自分のよさや役割を知り、人を思 いやる心の大切さを知ることで、自らの課題や集団の大切さを理解し適応する</p>
自 立	<p>(3) 「よりよく判断する力」 (意思決定能力)</p> <p>自己の意思と責任でよりよい選択・決 定・判断をおこなうとともに、その過程 での課題を積極的に取組、克服する力</p>	<p>⑥【家族と共に生きる力】 家族との関わりの中から、自らの役割や家族の大切さを知り、規則正しい生活習慣の 奨励、家族の対話や挨拶の励行など、家族とともに生き方を考え実践する</p>
		<p>⑦【自らの意思と責任で判断する力】 先を見通し様々なことからの特色を知り、今までに学んだ事を応用して計画などを作り、自らの意思と責任で判断する</p>
	<p>(4) 「情報を集め活用する力」 (情報活用能力)</p> <p>学ぶこと、働くことの意義や役割お よびその多様性を理解し、幅広く情報 を活用して、自己の将来の夢の実現や 生き方の選択に生かす力</p>	<p>⑧【自らが考え選択する力】 様々な選択肢について比較検討したり、様々な課題を克服したりして、自らにふさわし い選択を行っていく</p>
		<p>⑨【自らの課題を見つけ解決する力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実 現に向け、自ら問題を設定し、問題解決的な学習(考える力、調べる力、まとめる力 表現する力など)を取り入れ、解決に取り組む</p>
		<p>⑩【情報を収集し探索する力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択分 析・活用し、自らの進路や生き方を考える</p>
<p>(5) 「自己の夢をつくり上げる力」 (自己理解・将来設計能力)</p> <p>夢や希望を持って将来の生き方や生活 を考え、社会の現実をふまえながら、前 向きに自己の夢(将来)の実現を設計す る力</p>	<p>⑪【職業について理解する力】 生き方に関わる体験等を通して、様々な職業の内容や特徴について認識するととも に、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今やらなければならないことなどを理 解する</p>	
	<p>⑫【情報技術を活用する力】 コンピュータなど情報機器を使いこなし、情報モラルをふまえ、積極的に情報収集・選 択・表現・発信する</p>	
	<p>⑬【自分の社会的役割を認識する力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自らの果たすべき役 割等についての認識を深めていく</p>	
	<p>⑭【計画を企画し実行する力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、 実現に向けて行動する</p>	
	<p>⑮【心理的な自ら自立を図る力】 生活・学習上の多様な役割や意義等を理解し、自らの夢の実現に向けて価値観、 信念、理想を確立して生活設計を組立てる</p>	
	<p>⑯【社会的な自ら自立を図る力】 自分の身近なところから、何事についても自分の意思で決め、自分の力で取り組んで いけるよう自立意欲を向上する</p>	
	<p>⑰【意欲的に学ぼうとする力】 生きることへの自信と目標を持ち、基本的な生活習慣を身につけるとともに、子どもたち の主体的学習を促し、社会で適応できる学力の向上する</p>	

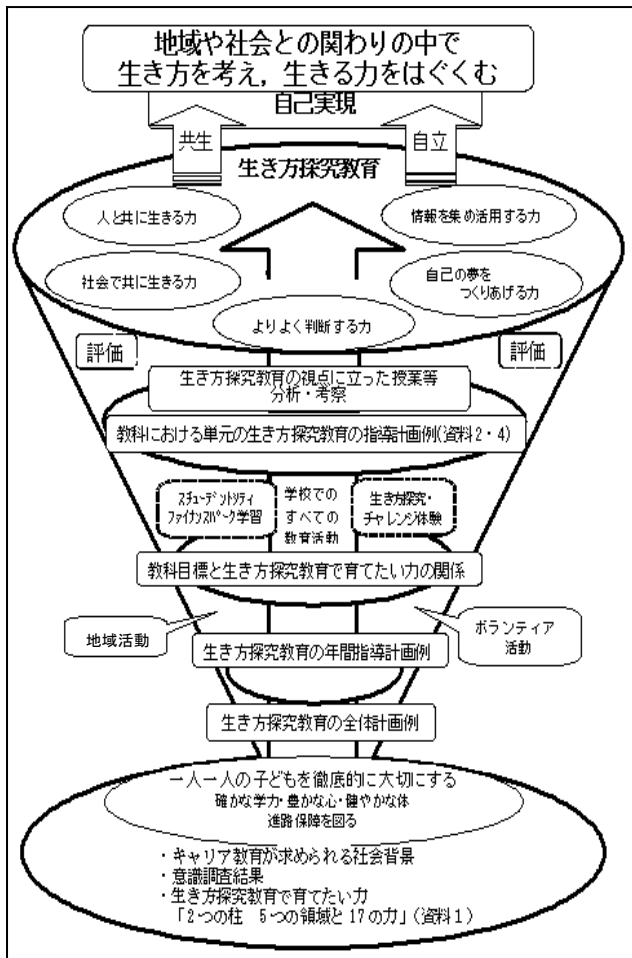


図1-3 研究構造図

(2) 全体計画(例)作成にあたり

全体計画や学習指導計画を作成するにあたり、本教育センター研究課の平成12年度・13年度に研究された「小学校における人権学習の展開に向けて」で、「人権教育は学校教育における特定の分野・領域に限定された教育ではなく、教育活動のあらゆる場面においてとりくまれるべきである」(18)と示されている考えに基づいた。この研究では、人権学習をすべての学校の教育活動を通して、各教育活動の目標や取組を変えるのではなく、人権の視点から見た学習内容を明らかにして、基本的なコンセプトと学習プログラムが提示されている。生き方探究教育は、進路や職業に関する教科だけに限定するものではなく、すべての教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などで実施されることが必要であることから、一致する考え方が多いと考える。そこで、カリキュラム作成にあたり、研究で示された「人権の視点から見た学習内容」や「教科・領域における人権学習の視点」を参考にすることにしたのである。

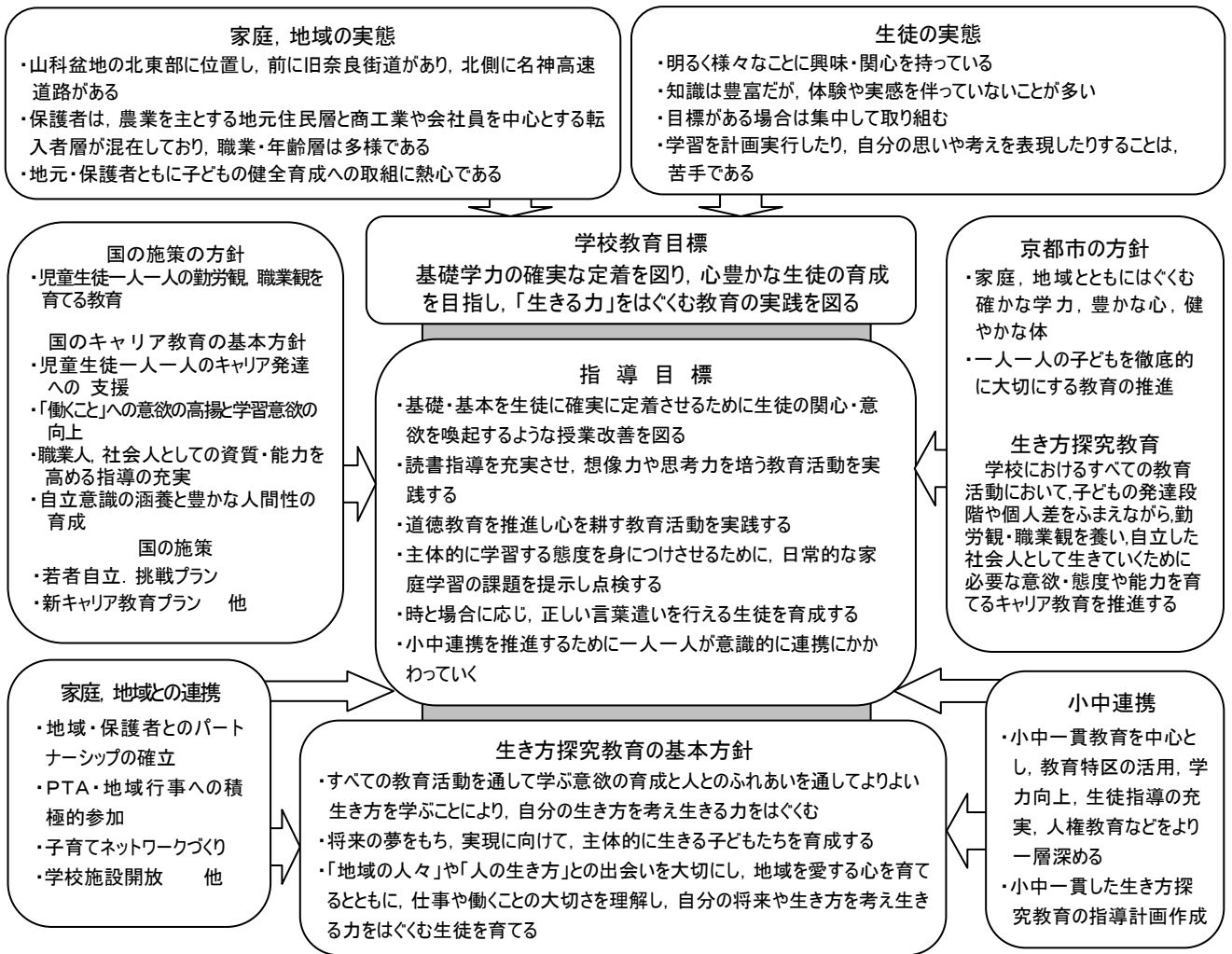
小・中学校における生き方探究教育の視点に立つ

た全体計画や学習指導計画を作成するにあたっては、各教科のねらいや指導計画を大きく変える必要はないと考える。各教科のねらいや指導計画において「学習プログラム枠組み(例)」で育てたい力を考えてみることで、子どもたちは、自らの生き方や将来展望が見えてくると考えるからである。そこで、各教科のねらいや指導計画を基に生き方探究教育の視点に立った全体計画(例)や年間指導計画(例)を作成することにした。

本市「生き方探究教育(試案)」では、自らの生き方をはぐくむための各学年及び育成学級における、生き方探究教育の学年目標を設定し、目標にそって、学校づくりが進められているように示した。各学校では、総合的な学習の時間をはじめ、特別活動や中学校の選択教科、高等学校の学校設定教科・科目の実施などが行われ、学校における教育活動がそれぞれ特色あるものになっている。このような中、生き方探究教育を、学校でのすべての教育活動を通して計画的に系統立てて進めることが、大切であると考えた。そして、各学校でのすべての教育活動を「生き方探究教育」の視点に立って、各教科・領域などにおけるねらいと内容を明確にすることにした。

そこで、本市教育委員会「学校教育の重点」や各学校における学校教育目標との関係をはじめ、教育課程上の位置づけ、生き方探究教育をどのように展開していくかを研究協力校の実態を念頭において全体計画(例)(図1-4)を作成した。全体計画を作成するにあたって大切なことは、以下の4点である。

- ①全体計画(例)では、学校教育目標を中心に置き、続いて家庭、地域の実態や子どもたちの実態、国や本市教育委員会の方針などの関係を考えながら、重点目標を設定した。
- ②その重点目標に基づき、地域・保護者との連携や小中の連携を考えながら、自校で取り組む生き方探究教育の目標を考え、基本方針を設定した。基本方針では、すべての教育活動を通して学ぶ意欲の育成や自分の生き方を考え、生きる力をはぐくむことに重点をおいた。
- ③自分の将来展望や生き方を考え、その実現に向けて、主体的に生きる子どもたちの育成を目指した。
- ④自己の生きる力をはぐくむための各学年および育成学級における、生き方探究教育の目標を、自校で取り組む生き方探究教育の目標を焦点化して設定した。そして、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの目標にそって生き方探究教育の視点に立った授業の方法や目標を定めた。



生き方探究教育の共生と自立を柱とする5つの領域と17の力（表1-2参照）

学年目標			
1年生	2年生	3年生	育成学級
・家族や地域の身近な人々の生き方を通して、自らの生き方を考え、自己理解を深め自らの将来を開拓していこうとする態度を育てる	・ファイナンスパーク学習・生き方探究・チャレンジ事業を基に、自己理解や進路情報について理解を深め、将来の生き方を考えながら、よりよい進路選択ができる資質を育てる	・生き方についての自覚を深め、望ましい職業観や希望を持ってその実現に向かって努力し、主体的に進路選択ができる能力を育てる	・発達段階に応じて、家族や地域の身近な人々とともに、自らの生き方を考え、自らの夢を育てる

教科	総合的な学習の時間	道徳	特別活動			その他
			学級活動	生徒会活動	学校行事	
・各教科における関連分野の学習 ・選択教科における関連分野の学習	・学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自らの生き方を考えることができる	・様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上につめる ・勤労の尊さや意義を理解し奉仕精神を持って社会に努める	・一人の社会人として自立するように、自らの夢をもち、自己実現に向けて、学ぶことの意義の理解、自主的な学習態度の形成し、将来設計をはぐくむ	・生徒会活動において、学校生活の充実や改善向上を図る活動、生徒の諸活動について調整に関する活動、学校行事への協力活動をおこなう	・生き方探究教育の視点に立って、勤労の尊さや創造することの喜びを知らせ、自らの生き方について考えさせる活動をおこなう	・ファイナンスパーク学習・生き方探究・チャレンジ体験・野外活動などの体験学習を充実し、一連の流れのもとで、自らの生き方について考えさせる

地域や社会との関わりのなかで
生き方を考え、生きる力をはぐくむ

図1-4 生き方探究教育の全体計画（例）（研究協力校における試み）

(3) 年間指導計画(例)の作成にあたり

次に作成した全体計画(例)を基に、生き方探究教育で育てたい力と教科・領域の関連活動(例)および、各学年における生き方探究教育の年間指

導計画(例)を作成した。

作成にあたっては、年間を通した具体的な学習や活動をおこなうために、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などにおける指導計画を、

表1-3 生き方探究教育の育てたい力と教科・領域の関連活動(例)(中学校の例を示す)

＼ 校種・学年		中学校			
		1年生	2年生	3年生	
キャリア発達にかかわる力		職業に対する現実的探索の時期			
＼ 目標		＊自分自身の将来の夢や課題を見つけ、職場体験に取り組み、将来の夢や職業についての関心・意欲を高める			
領域	発達にかかわる力	生き方探究教育に関連する教科・領域の活動例			
自己実現 生き方を考え、生きる力をはぐくむ教育	共生 (人間関係形成能力) (社会参画能力)	【自分と他者を理解する力】	国語「新しい世界へ」 道徳「真の友情」	国語「心を開く」 道徳「相手の立場の尊重」 学級活動「自分を知る・友達を知る」	道徳「共に生きる」 道徳「個性の伸長」 社会「わたしたちの生活と現代社会」
		【コミュニケーションを豊かにする力】	音楽「歌声をみがこう」 英語「Starting Point」	英語「L7. 相手にたずねる」 音楽「アンサンブルの魅力」 音楽「歌声をみがこう」	英語「Unit2 L4. 将来の夢についてのスピーチ」 音楽「合唱の表現を深めよう」 道徳「日常の礼儀」
		【世界に視野を広げる力】	英語「L2. 人の紹介」 英語「L6. できること・・・」	社会「世界の国について調べよう」 国語「事実と意見」 道徳「国際理解」	音楽「世界の諸民族の音楽に親しむ」 美術「北斎と遠近法」 社会「現代の国際社会」
		【地域と共に生きる力】	美術「スケッチの楽しみ」 社会「身近な地域を調べる」 総合的な学習「地域を知ろう」 学級活動「ボランティア活動の意義と理解」	道徳「社会奉仕」 道徳「社会生活ときまり」 道徳「郷土の伝統を守る」	美術「暮らしや生活を彩る」 道徳「社会連帯」 道徳「伝統を守る」
		【集団に適応し共に生きる力】	保健体育「武道・ダンス」 道徳「集団生活の向上」 学校行事「運動会 文化祭 合唱コンクール」	保健体育「武道・ダンス」 学級活動「集団の一員」 学級活動「運動会 文化祭 合唱コンクール」	学級活動「運動会 文化祭 合唱コンクール」 保健体育「武道・ダンス」 道徳「学級・学校の一員」
		【家族と共に生きる力】	技術家庭「室内環境の整備と住まい方」 道徳「家族と私」	技術家庭「家庭と家族関係」 道徳「家族の一員」 学級活動「家族との話し合い」	道徳「家族愛」 道徳「集団生活の向上」
	自立 (自己理解・将来設計能力)	【自らの意志と責任で判断する力】	道徳「責任の自覚」 学級活動「自主・自律」 保健「心身の機能の発達と心の健康」	保健「健康と環境」 道徳「自律的な生活」	道徳「自己の確立」 進路指導「進路志望調査」 美術「環境と響きあう造形」
		【自らが考え選択する力】	道徳「人類愛」 学級活動「自分のよさを発掘しよう」	道徳「充実した生き方」 道徳「人間愛」	国語「状況に生きる」 道徳「人間の強さ」 学級活動「進路選択の決定に向けて」
		【自らの課題を見つけ解決する力】	学級活動「教育相談アンケート」 学級活動「勤労の尊さ」	自分みつめる(美術) 自律的な生活(道徳)	学級活動「自分の進路希望を実現するために」 進路指導「高校体験学習・説明会」 学級活動「社会における差別」
		【情報を収集し探索する力】	技術家庭「情報と私達の生活」 美術「世界の七不思議図鑑」 数学「比例と反比例」	総合的な学習「経済・金融の仕組みを知ろう」 社会「日本の地域の分け方」 学級活動「進学・就職の状況」	総合的な学習「経済・金融の仕組みを知ろう」 理科「地球と宇宙」 数学「平方根」
		【職業について理解する力】	総合的な学習「職業について調べよう」 学級活動「職業のいろいろ」 学級活動「社会と職業」 総合的な学習「フィナンスパークへ行ってみよう」	総合的な学習「生き方探究・チャレンジ事業」 総合的な学習「フィナンスパークへ行ってみよう」 学級活動「資格・免許を必要とする職業」	道徳「勤労の尊さ」 道徳「働く喜び」
		【情報技術を活用する力】	技術家庭「コンピューターのしくみと基本操作」 社会・理科・技術家庭「自由研究」 理科「大地の変化」 技術家庭「機器のしくみと保守点検」	社会・理科・技術家庭「自由研究」 技術家庭「情報と私達の生活」	社会・理科・技術家庭「自由研究」 技術家庭「マルチメディアの活用」 学級活動「情報活用能力を高めるために」

＊この表は、平成18年度京都市教育委員会「学校教育の重点」、京都市小・中学校・中学校の道徳・特別活動の指導計画、小学校・中学校・高等学校・養護学校学習指導要領、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」等を参考に作成した。

学年ごとに生き方探究教育の活動計画に整理した。
 まず、「生き方探究教育で育てたい力と教科・領域の関連活動(例)」(以下 関連活動(例)とする)を作成し、表1-3で示した生き方探究教育における「5つの領域」と各学年における各教科の単元

と育てたい力の関係を示した。

この関連活動(例)は、各校種・各学年における生き方探究教育の「5つの領域と17の力」で育てたい力と各教科の単元や道徳・特別活動・総合的な学習の時間などのすべての教育活動との関わり

表1-4 中学校3年の生き方探究教育で育てたい力の年間指導計画(例) ()の数字は、生き方探究教育の5つの領域

月	教科	単元の目標	生き方探究教育で育てたい力
4	技家 「消費と環境」	・環境に配慮した消費生活を工夫する。	(5)の⑩「自分の社会的役割を認識する力」 物品選択、購入、活用、廃棄について点検することで、環境に配慮した消費の工夫を知る
5	美術 「見え方の不思議」	・様々な図法や錯視の原理を応用して見る人に不思議な体験をさせる世界を制作し、 <u>不思議な視覚の世界を味あわせる。</u>	(3)の⑨「自己の課題を見つけ解決する力」 図法や錯視の原理を応用することで、不思議な視覚の世界を表現する力を育てる
6	数学 「平方根」	・数の平方根について理解し、数の概念の理解をいっそう深めるとともに、 <u>数を用いてものごとをいっそう広く考察・処理することができるようになる。</u>	(4)の⑩「情報を収集し探索する力」 電卓を使った平方根の近似値の求め方を学習することで、広く考察・処理する力を育てる
7	社会 「一人の人間としてのわたしたち」	・身近な社会生活に対する関心を高め、課題を設け意欲的に追究させ、よりよい社会生活を営んでいくために、 <u>個人と社会とのかかわりについて考えようとする態度を養う。</u>	(1)の①「自分と他者を理解する力」 人間は一人生きていけるか、生きていく上で必要なものは何かを考える力を育てる
8	社会・理科・技家 「自由研究」	・これまで学習したことを基にして、 <u>自主的に研究したいテーマを考え、まとめる。</u>	(3)の⑧「自己が考え選択する力」 子どもたちが自主的にテーマを考え、選び、調べることで、選択、判断する力を育てる
9	英語 「L4 将来の夢のスピーチ」	・将来の夢を語ることを通して、不定詞の表現について学習する。	(1)の②「コミュニケーションを豊かにする力」 子どもたちが、他者が語ることを聞く活動を通して、他者を理解する力を育てる
10	理科 「地球と宇宙」	・天体の日周運動の観察を行い、その観察記録を地球の自転と関連つけて、とらえること。	(4)の⑩「情報を収集し探索する力」 子どもたちが、天体の動きを調べ、記録することで、観察力を育てる
11	社会 「消費生活と経済のしくみ」	・身近な消費生活を中心に <u>経済活動の意義を理解させるとともに価格や市場経済の基本的な考え方や金融のはたらきについて考えさせる。</u>	(5)の⑪「意欲的に学ぼうとする力」 子どもたちが、意欲的に学習し、経済活動の営みを学習し理解する力を育てる
12	保健体育 「武道 ・バレーボール」	・互いに礼儀作法を重んじ、 <u>相手を尊重する態度を養わせる。(武道)</u> ・ルールに関する知識を理解し <u>公正にゲームがすすめられるようにさせる。(バレー)</u>	(2)の⑤「集団と共に生きる力」 ルールを知り、自らやグループの目標を実現するために工夫することで、他者と共に協力する大切さを育てる
1	国語 「未来に向かって」	・感想の交換により、 <u>相手の立場を尊重しながら話したり聞いたりして、自分の考えを深める。</u>	(1)の①「自分と他者を理解する力」 (1)の②「コミュニケーションを豊かにする力」 相手の立場を尊重し、感想を交流することで、他者を理解する力を育てる
2	音楽 「卒業式に向けて」	・合唱のすばらしさに関心を持ち、 <u>楽曲にあった発声を工夫することで、意欲的に取り組む。</u>	(2)の⑤「集団と共に生きる力」 卒業に向けて中学校の仲間と歌う最後の合唱であることを意識し、人と共に生きる大切さに気づかせる
3			

を一部示したものである。そして、教科の単元や道徳・特別活動・総合的な学習の時間などのすべての教育活動において、生き方探究教育の「5つの領域と17の力」で育てたい力をはぐくむことができると考えた。ここで示した内容は、活動などの一部を示したものである。

子どもたちの個性を大切に、子どもたち一人一人を大切にすることを重視する観点から、指導することが重要である。この点からも、各学校や家庭、地域の実態、子どもたちの学習状況を考慮する必要があると考える。

各学校・各教職員集団によって生き方探究教育で育てたい力は、異なることも考えられる。また、各教科の単元の目標が異なることも考えられ、道徳・特別活動・総合的な学習の時間などのすべての教育活動においても生き方探究教育で育てたい力は異なると考える。

次に各学年における「生き方探究教育の年間指導計画(例)」(以下 年間指導計画(例))を示す。

(表1-4) この年間指導計画(例)は、現行の各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間などの指導計画とは別のまったく新しい年間指導計画指導計画(例)をつくりだすものではない。各学校においては、現行の年間指導計画に基づいて指導される必要がある。そして年間指導計画(例)では、各学年において、各月ごとに各教科の各単元における生き方探究教育で育てたい力を示した。また、各教科、領域の単元のねらいにそって育てたい力を、多く当てはめることができたが、ここではなかでも特に育てたい力のみを入れることにした。

この年間指導計画(例)も、関連活動(例)と同じく、考えられる一部を示したものである。

また、各学校・各教職員によって育てたい力と単元および指導をおこなう月日や指導の流れの関係が違ってよいと思われる。

このようにすべての教育活動を、生き方探究教育の視点に立って見ることで、今ある年間指導計画(例)がより充実したものになり、子どもたちは「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」視点を身につけることができると考える。

引用文献

- (1) 京都市教育委員会『生き方探究教育 京都市スタンダード(試案)』 2006.2 p.13
- (2) 中央教育審議会『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』 1999.12 第6章 第1節
- (3) 文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』 2004.1 p.7
- (4) 文部科学省『中学校学習指導要領 総則』 2004.1 p.5

- (5) 前掲(4) 2004.1 p.104
- (6) 文部科学省『小学校学習指導要領 総則』 2004.1 p.5
- (7) 京都市教育委員会『平成18年度 学校教育の重点』 2006.4 p.1
- (8) 前掲(1) 2006.2 p.6
- (9) 前掲(1) 2006.2 p.5
- (10) 飯田一藏「夢や希望をはぐくむキャリア教育の展開」『総合教育センター研究紀要第48集』滋賀県総合教育センター 2004.6 p.64
- (11) 反町京子「夢をかなえる小学校からのキャリア教育」『平成17年度研究紀要』千葉市教育センター 2006.3 p.9
- (12) 愛知県犬山市立犬山南小学校「夢を持ち、仲間と学び合うなかで、自分を拓く子-自分づくり、仲間づくりをはぐくむキャリア教育-」 2005.11 p.4
- (13) 前掲(3) 2004.1 p.22
- (14) 前掲(1) 2006.2 p.6
- (15) 前掲(3) 2004.1 p.35 参考1
- (16) 前掲(1) 2006.2 p.9
- (17) 前掲(1) 2006.2 p.9
- (18) 松下佳弘「No.465 小学校における人権学習の展開に向けてⅡ」『平成13年度研究紀要Vol.1』京都市立永松記念教育センター 2003.3 p.25

第2章 生き方探究教育の視点に立った 社会科学学習の実践例

小学校学習指導要領では、社会科の目標として「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」(19)と示している。

中学校学習指導要領では、社会科の目標として「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」(20)と示している。これらは、社会生活の意味を正しく理解し、自らの役割を自覚し社会に適応して、向上させる資質や能力を育てることを目指している。

また、国際社会に生き、国家・社会の形成者として必要な基礎を養うことも目指している。以上のことから、中学校社会科指導要領で示されている内容は、生き方探究教育と深く結びついていると考えられる。

昨年度の教職員対象の意識調査では「生き方探究教育の実践をおこなうとすればどの教科が良いと考えられているか」の質問で、社会科がもっとも良いと思う教科としての回答が多かった。

そこで、生き方探究教育で育てたい力を大切に
した授業実践を進めた。

小学校6年において4時間、中学校3年において
3時間の学習を、以下の表2-1の日程で、研究協力
校において、研究協力員による授業の観察・記録
をおこなった。

表2-1 授業の観察、記録の流れ

4月	研究概要説明
5月	研究協力員への説明・協議
6・7月	中学校での授業（観察・記録）
7・9月	小学校での授業（観察・記録）
8～10月	研究協力員と授業後の協議

各授業の前後には、アンケートを実施し、各学
習での子どもたちの学習ノート、ワークシートや
定期テストなどの提供も受けることができた。こ
れらの資料を手がかりに、小・中学校での生き方
探究教育の視点を取り入れた実践授業の流れと記
録をまとめた。

第1節 小学校6年の社会科学習を通して

(1) 子どもたちの実態と小学校6年の社会科の授業

京都市立養正小学校の6年1組の子どもたちは、
全員で21名である。こじんまりとした雰囲気では
あるが、非常に明るく、何事にも前向きに取り組
むことができる。授業中の発言も活発で、はきは
きと答えることができる。しかし、担任の話では、
自分の将来の夢などを、はっきりと持っている子
どもたちは少ないらしい。この実態をふまえ、子
どもたちに自らの生き方を考え、生きる力をはぐ
くむ授業展開を考えることにした。

小学校では、授業実践を進めるにあたり、小学
校6年社会科の日本の歴史の領域でおこなった。

小学校の日本の歴史の学習目標（表2-2）は、以
下である。

表2-2 小学校の日本の歴史の学習目標 (21)

- | |
|---|
| <p>①我が国の歴史は、各時代において様々な課題の解決や
人々の願いの実現に向けて努力した先人の働きによっ
て発展してきたことを理解し、我が国の歴史への興
味・関心を深め、また、我が国の歴史や文化を大切
にし、国を愛する心情を育てるようにする。</p> <p>②我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代
表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活
用して調べ、自分たちの生活の歴史的背景、歴史を学
ぶ意味を考えるようにする。</p> |
|---|

この目標をふまえ、生き方探究教育の視点に立っ
た学習例を考えた。上記目標①の様々な課題の解
決や人々の願いの実現に向けて努力した先人の働

きや生き方にふれることを通して、子どもたちは、
先人の生き方と自らの生き方を比較し、社会の現
実をふまえながら、自らの将来の夢の実現を設計
する力をはぐくむきっかけをつかむことができ
ると考える。

また、我が国の歴史への興味・関心を深め、歴
史上の出来事やその時代に生きてきた人物の様子
などを知ることを通して、他者を知り、人とのコ
ミュニケーションを図り、協力・共同してものご
とに取り組む大切さを感じることができるのでは
ないかと考える。

また、子どもたちが、コンピュータなどの情報
機器を使いながら、歴史上のいろいろな資料など
を調べることを通して、情報機器の使い方を学習
するとともに、自らの将来や生き方を考える糸口
をつかむことができると考える。

授業では、日本の歴史の「3人の武将」の単元を
取り扱うことにした。この単元の目標は、以下の
表2-3である。

表2-3 単元「3人の武将」の目標 (22)

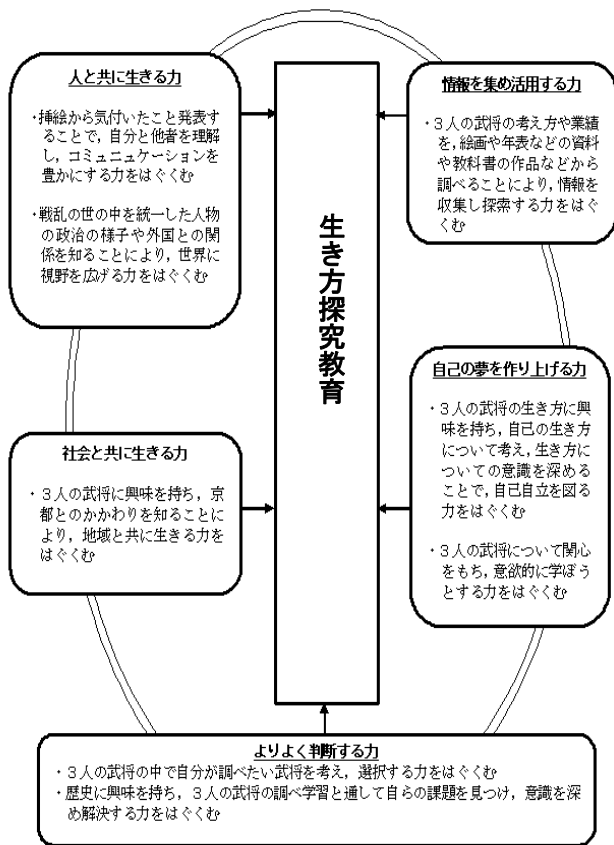
- | |
|---|
| <p>○織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人の武将の業績を
中心に調べ、戦乱の世の中が次第に統一されていった
様子や外国との関係が分かるようにする。絵画、地図、
年表などを基に、3人の武将の戦いや政治の様子を調
べ、全国統一に至る道筋を整理するようにする。</p> |
|---|

単元目標にそって、3人の武将の業績や政治の様
子を調べ、全国統一に至る道筋を整理した。子
どもたちに、3人の武将のそれぞれの生き方に着目さ
せ、それぞれの武将の生き方と全国統一とのわか
わりについて考えさせることに視点をおき、表2-6
に示す単元の指導計画を作成した。

指導計画作成にあたり、生き方探究教育の視点
に立った授業をおこなうために、各学習項目にお
ける生き方探究教育の目標にそって、学習の流れ
やねらいを組みかえることもできると考えた。

しかし、単元目標や学習の流れを新たに組みか
えるのではなく、単元目標を生き方探究教育の学
習プログラム枠（例）の「5つの領域と17の力」の
視点に立って見ることで、より深くねらいが達成
できると考え、単元目標にそった形で、育てたい
力をはぐくむための指導計画を作成した。

図2-1に目標達成のための単元と育てたい力との
関係を示した。この単元の授業において、生き方
探究教育で多くの育てたい力をはぐくむことが
できると考えたが、子どもたちの実態を把握し、
教材研究を進めるなかで1時間の学習項目において
は、2～3の力のみにするにすることにした。



上記のように、生き方探究教育で育てたい力は、相互に関係し合っている。

図2-1 目標達成のための単元と育てたい力との関係

学習を進めるにあたり、子どもたちの意識を把握するために授業の事前及び事後のアンケートをおこなうことにした。

アンケートの内容は、以下の表2-4の通りである。

表2-4 授業前・後アンケートの設問項目

1. あなたは歴史に興味を持っていますか。
2. あなたは織田信長・豊臣秀吉・徳川家康を知っていますか。
3. あなたは織田信長・豊臣秀吉・徳川家康のなかでだれの生き方に興味を持っていますか。
4. あなたは将来なりたい仕事ややってみたい仕事がありますか。

以下は授業後のアンケートのみの質問

5. あなたは将来の生き方を実現するために3人の武将の生き方が役に立ちましたか。
6. 将来どのような生き方がしたいですか。

授業では、自らの将来像を描かせるという視点を大切にしながら展開を計画した。

またアンケートや授業中の子どもたちの発表や発言によって、授業において、生き方探究教育で育てたい力をはぐくむきっかけをつかむことができたか、どのように変容したかをみることにした。

(2) 「3人の武将」の学習を通して

「3人の武将」の単元の学習項目では、「3人の武将の業績を中心に調べ、戦乱の世の中が次第に統一されていった様子や外国との関係が分かるようにする」「絵画、地図、年表などを基に、3人の武将の戦いや政治の様子を調べ、全国統一に至る道筋を整理するようにする」(23)とねらいを示している。

授業は表2-5のような流れでおこなった。まず、3人の武将がその時代を、どのように生き抜き、どのような生き方をしていたのかを調べる学習を設定した。

表2-5 授業の流れ

1. 長篠合戦と3人の武将
3人の武将について知っていることを発表する。
調べたい武将を決める
どんな調べ方・まとめ方をするか考える。
2. 調べてみよう (2時間)
コンピュータ室・図書室・視聴覚室・教室
3. まとめ
調べたことを、プリントやノートにまとめる。
4. 発表
調べたことや疑問に思ったことを発表する。

次に、3人の武将の業績や生き方について情報機器などを使って資料を調べさせた。

3人の武将について調べさせるにあたり、どの武将について調べたいかを選ばせて学習を進めることは、自らの意思と責任で判断する力をはぐくむきっかけをつかむことができると考えた。

そして子どもたちが、調べた人物の生き方と自らの生き方と重ねることを通して、将来どのような自分になりたいのかという「将来像」を考えさせることにした。

このように、3人の武将の生き方と自らの生き方と結びつける学習を通して、歴史に興味を示し、自身の将来について考える活動をおこなうことができると考えた。

以下、授業の様子についての主な活動と子どもたちの様子について記述する。

ア 1時間目の授業

ここでは、3人の武将が共に活躍する「長篠合戦」についての学習をおこなった。授業では、教科書に記載されている「長篠合戦図」を拡大した図を提示し、自分の意見を積極的に発表することとともに、「他者の発表をしっかりと聞くこと」を意識させることにした。

はじめは、なかなか意見が出なかったが、担任

が子どもたちに「合戦図をよく見て、わかることをどんどん発言しよう」とはたらきかけた。しばらくして子どもたちからは「織田信長と武田とは全く違う戦い方をしている」「織田信長は鉄砲を

使っている」などの発言が出てきた。

また、担任から「どんなに細かいことでもいいですよ。もっとじっくりと合戦図を見てみよう」と言葉をかけると、表2-7のような非常に興味のある

表2-6 小学校6年社会科指導計画例 (ゴシック体は、特にこの単元で、重点をおいた生き方探究教育の視点)

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	生き方探究教育の視点	評価の視点
<p>①「長篠の戦い」について、調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 織田・徳川の連合軍対武田軍 鉄砲隊 馬防ぎの柵 長い旗 織田・徳川連合軍の勝利 <p>○これからの時代を築く3人の武将について知り、自分の調べたい人物を決め調べる計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 織田信長 豊臣秀吉 徳川家康 	<ul style="list-style-type: none"> p. 44・45の挿絵から気づいたことを発表するようにしていく。 p. 44の顔の絵とp. 45の年表などを参考に興味を持った人物を一人選び、調べていくようにする。 一人の人物の中をさらに細かなテーマを設定し、個人で、又はグループごとに調べていくこともできる。 	<p>(1)-①②挿絵から気付いたこと発表することにより、様々な事象を理解し、共感・感動することで、お互いに認め合うことにより「自分と他者を理解する力」や「コミュニケーションを豊かにする力」を育てることができる</p> <p>・挿絵や教科書から気づいたことを発表する</p> <p>(3)-⑧3人の武将のなかで自分が調べたい武将を考え、選択肢を考え、ふさわしい選択をすると共に自らの生き方を考えることにより「自己が考え選択する力」を育てることができる</p> <p>・3人の武将で調べたい武将のなかで、自分が興味を持った武将を選ぶ</p> <p>(4)-⑩3人の武将の考え方や業績を、絵画や年表などの様々な資料を収集し、そこから自らの生き方と重ねることにより、「情報を収集し探索する力」を育てることができる</p> <p>・3人の武将についていろいろな資料を用いて調べさせる</p>	<p>(関)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「長篠の戦い」の挿絵や年表から、3人の武将について関心を持ち、意欲を持って調べようとする。(発言・ノート)
<p>戦国の世のなかで活躍した3人の武将は、どんな人物だったのだろう。</p> <p>②③自分が選んだ武将について、調べまとめる。</p> <p><織田信長></p> <ul style="list-style-type: none"> 桶狭間の戦い 鉄砲 キリスト教 延暦寺の焼討ち 安土城 信長の性格 <p><豊臣秀吉></p> <ul style="list-style-type: none"> 検地 ・ 刀狩 大阪城築城 朝鮮への侵略 <p><徳川家康></p> <ul style="list-style-type: none"> 関ヶ原の戦い 征夷大將軍 江戸幕府 	<ul style="list-style-type: none"> 人物の調べ方やまとめ方についてはp. 46・51のまなび方コーナーのポイントを参考にするようにしていく。 p. 47・49・51の作品のページも参考にしよう助言していく。 秀吉による朝鮮侵略が朝鮮の民衆を苦しめ国土を荒らした上に、日本の民衆をも苦しめる結果になったことに気付くようにしていく。 	<p>(3)-⑨歴史に興味を持ち、3人の武将の調べ学習を通して、意識を深めることにより自らの生き方や課題を見つけることにより「課題を見つけ解決する力」を育てることができる</p> <p>・調べ学習を行い歴史に興味を持たせる</p> <p>・自己の課題を見つけさせる</p> <p>(4)-⑩3人の武将について、教科書の作品のページやコンピュータなどの資料から調べ、そこから自らの生き方と重ねることにより「情報を収集し探索する力」を育てることができる</p> <p>・3人の武将について教科書の作品のページを参考にして調べさせる</p> <p>(5)-⑰秀吉による朝鮮侵略が朝鮮の民衆を苦しめたことなどを気づき、意欲的に学ぶことにより「意欲的に学ぼうとする力」を育てることができる</p> <p>・朝鮮侵略について、朝鮮や日本の民衆が苦しむ結果になったことに気づかせる</p>	<p>(観)</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が選んだ武将について戦いの仕方、全国統一の進め方などについて調べ、作品にまとめることができる。(ノート・作品)

る発言が出てきた。

表2-7 絵図から見えてきたこと

「山のなかで、川をはさんで戦っている」
「鉄砲隊を3隊に分かれた」
「ほりと柵を使っている」
「今までの戦いとちがう」
「信長は鉄砲を使っている（3000丁）」
「独特の旗印がある（五・大・日の丸ほか）」
「信長が一番後ろにいて、家康が前にいる」
「武田の陣には柵がなく伏せている人が多い」

表2-7以外にも「武田の兵は動いているのに織田の兵は動いていない」「武田軍はつぎつぎと倒れている」などの発言もあった。担任は、子どもたちの一人一人の発言を丁寧に受け止めた。

また、担任が同じ意見の発表もきちんと受け止めることを大切にすることで、「自分も同じだ」「そう思う」など、友達の意見に共感したり同意したりする声があがった。

このように、指導者は、資料に関する見方を助言するとともに、互いの意見をしっかり聞いたり認めあったりするはたらきかけを大切にされた。その結果、お互いの発表を大切にしながら活発に意見交流を進める学習ができていた。

挿絵や教科書から気づいたことを発表することで、『自分と他者を理解する力』や『コミュニケーションを豊かにする力』をはぐくむ



図2-2 長篠合戦図を使っの授業

発言の内容に着目すると、鉄砲隊の様子や織田信長の戦い方に興味をもっているようであった。また、武田勝頼の軍勢の様子や、独特の旗印や陣のとり方などに興味を示す内容も多かった。

このように、指導者が、子どもたちに育てたい力を意識して授業を組み立てることにより、「長篠合戦」に興味を持ち、積極的に自分の意見を発表したり、じっくりと友だちの発表を聞いたりする活動をおこなうことができた。

次に、3人の武将のなかで自分が調べたい武将を一人選び、調べまとめる活動をおこなった。この活動を通して、子どもたちは自らが選択し、必要

な情報を集め活用し、自らの生き方について考える力を育てたいと考えたからである。

まず担任が「織田信長について知っていることを発表しましょう」と呼びかけると、「桶狭間の戦いで、2000人の兵で今川氏25000人の兵を破った」

「比叡山延暦寺を焼討ちした」「仏教がじゃまで、僧を皆殺しにした」「楽市楽座をひらいた」「安土城を建てた」「自分の家来の明智光秀に殺された」などの発言が出てきた。子どもたちは、これまでに学習した知識として、織田信長のことについてよく知っていることがわかった。同様に、豊臣秀吉と徳川家康の2武将について尋ねると、2武将とも織田信長同様に多くの発言が出てきた。

また、調べ学習に入る前に、3人の武将の気性をたとえた「ホトトギスの歌」を担当が読んで聞かせた。そして、子どもたちに「この歌を聞いて、思ったことや感じたことを発表してみよう」と問いかけた。この歌については、以前に聞いたことがあるのか、知っている子どもたちが多かった。

子どもたちからは、この歌を思い浮かべながら3人の武将について「織田信長はこわい」「信長はわがままじゃないかな」などの発言があった。また「秀吉はなぜ自分の思うようにするのか」「家康はなぜ待ったのだろう」などの疑問を持つ子どもたちも出てきた。他にも、子どもたちからは、以下の表2-8のような発言が出てきた。

表2-8 3人の武将の生き方について

- 「織田信長」
- ・新しいものが好き
 - ・残酷だ、気に入らないと殺す
 - ・妹の夫まで滅ぼした
 - ・関所をやめさせたり、楽市楽座をつくったり人のためにもがんばった
- 「豊臣秀吉」
- ・自分中心の考えで、欲ばり
 - ・何でも自分の思うままにする
 - ・策略家
 - ・全国统一をしたり、お金や税を統一したり、検地・刀狩をしたり、人のために、城下町でいろいろなことをした
- 「徳川家康」
- ・全国を統一し、戦乱の世の中をおさめた
 - ・豊臣氏を滅ぼし、幕府をつくった
 - ・のんびりしているが、動かず、でんとしている
 - ・策略家

子どもたちの発言には、織田信長の生き方について「残酷だ」と考えている反面「楽市楽座などをつくってがんばった」などがあった。

そして、豊臣秀吉の生き方についても「自分中心で欲ばり」と考えている反面「全国统一をしたり、人のために城下町でいろいろなことをした」

と感じていることもわかった。

また、徳川家康の生き方についても「のんびりしている」「なかなか動かない」と考えている反面「策略家」と答えている。このように、子どもたちは、自分で感じたことを発表し、3人の武将の生き方について、興味を示すことや3人の武将に共感できるところを知ることができた。

担任が紹介した歌をきっかけにして、3人の武将のそれぞれちがった生き方をしていることについて、興味を持ち始めた子どもたちが多かった。

次に、子どもたちに、3人の武将を調べるにあたって、何について調べるかを考えさせた。この活動を通して、子どもたちが、自らが考え、自ら選択する力をはぐくむことができると考えたからである。

そこで担任は、調べたい武将の情報を見つけ、できるだけ多くの情報を集めさせることを意識して指導をおこなった。子どもたちからは、興味を引くような内容が出てきた。内容は「信長はなぜ秀吉をかわいがり、光秀を憎んだのだろうか」「秀吉と家康はなぜ戦ったのだろうか」などの発言があった。

表2-9 3人の武将について調べたいこと

「織田信長」

- ・ 信長はなぜ室町幕府を滅ぼしたのだろうか
- ・ なぜ明智光秀に殺されたのだろうか
- ・ 楽市楽座をおこなった理由

「豊臣秀吉」

- ・ 朝鮮をどのようにして攻撃したのだろうか
- ・ なぜ大阪城をたてたのだろうか
- ・ どうして検地や刀狩をしたのだろうか
- ・ 全国統一をどのようにしておこなったのだろうか

「徳川家康」

- ・ なぜ豊臣氏を滅ぼしたのか
- ・ なぜ秀吉が死ぬまで豊臣氏を滅ぼさなかったのか
- ・ なぜ幕府を開いたのか

他にも、表2-9のような発言もあった。子どもたち一人一人に調べたい武将を選ばせ、授業を進めた。調べる武将をだれにするかを、子どもたち自身に選ばせたいと思い、担任から「調べる武将を選択する時に、どうすれば良いかを考えてみましょう」とはたらきかけた。すると、「先生が決めればよい」「だれでもいい」などの意見がはじめは出てきた。また、「自由に選ぶ」「話し合いをする」「班ごとに決めたら」といった意見も出てきた。

担任は、このまま子どもたちに、自由に発言させ選ばせると、調べたい武将がなかなか決まらないのではないかと考えた。

そこで担任から「先生が決めるのではなく、班

ごとに振り分けるのでもなく、みんなでもっと意見を出し合って一番よい方法を考えてみよう」とはたらきかけた。何をなぜ調べたいのか、その理由を考える時間を、じっくりととることで子どもたちの、本当に調べたいことを絞っていく姿を大切にしたいからである。

話し合う時間を確保すると、子どもたちは個々に話し合い、いろいろな意見を出しながらも、他者の意見も聞き、班ごとに話し合っ、調べる武将について選ぶことができた。子どもたちは、選択した理由を出し合い、そして様々な選択肢について考え、他者の意見も聞くことができた。

イ 2時間目の授業

この授業では、調べ学習をおこなった。教室、視聴覚室、図書室の本や資料を調べ、コンピュータ室では、インターネットで、3人の武将のついでの情報を見つけ、できるだけ多くの情報を集めさせることにした。

情報機器を使って調べ学習をおこなうことで、『情報を収集し探索する力』をはぐくむ



図2-3 コンピュータ室にて調べ学習

子どもたちは、コンピュータなどの情報機器を今までにも何度か使っていたのか、手際よく使いこなす、つぎつぎと自分の調べたい武将の情報を見つけ、資料として集めることができた。

集めた情報は担任が作成した「調べ学習まとめプリント」に記入し、業績や生き方をまとめ、疑問や感想などを書き出した。なかには、自分の調べたい内容がなかなか見つからず、困っている子どもたちもいたが、担任からどのように調べればいいのか助言したり、友だちのアドバイスなどを聞きながらコンピュータに向かい、自分の調べたい内容について追究する姿が見られた。

ウ 3時間目の授業

3時間目の授業では、調べたことをまとめる活動

をおこなった。ここでは、3人の武将について調べた内容をまとめ、それを交流することで、歴史に対する興味をさらに深めさせたいと考えた。

豊臣秀吉を調べた子どもたちの発表の中には次の意見があった。

「豊臣秀吉は策略が上手で、何事も自分中心に考えているように思っていたが、結構城下町を造ったり、お金を統一したり、人々のことも考えている」「豊臣秀吉には、よい家来がたくさんいたことで、天下統一を果たせたのではないだろうか」などである。

このように、調べたことを基にして、人と人との関わりに着目して、まとめている意見があった。

また、「自分ならもっと人々のためにお金を使って、農民に楽なくらしをさせた、そうすれば人気が出たかも」「私ならもっと京都に大きなお城を造った。京都が当時の中心だったから」のように、自らの考え方を述べている内容があった。

このように、子どもたちは自分の調べたいことをよく考えて選ぶことや、調べた内容をノートなどにまとめること、そしてまとめたことから考えたことを交流することを通して、知識だけではなく、3人の武将の生き方について考えることができたようである。

エ 4時間目の授業

最後の授業では、調べたことや友達の発表からさらに追究したことについて話しあった。そのなかで、武将の生き方と自分の考えを重ね合わせたとき、「自分はどのように生きていけばよいのだろうか」のように、自らの将来について考えることができる活動ができるように場を設定した。

豊臣秀吉を調べた子どもには、以下のような発表があった。

「豊臣秀吉には、竹中半兵衛や弟の秀長などよい家来がたくさんいたことで、天下統一を果たせたのである」

「美濃の斎藤氏との戦いで、豊臣秀吉は墨俣城を一夜で造った話は有名だが、この話は当時の史料に関係する記述がない。後の時代に作られたとする説が強い」

「秀吉は『猿』だと呼ばれていたとよく言われるが、本当は信長からはちがった呼び名で呼ばれていた」など書籍やインターネットを使って調べる活動を設定したことで、教科書に載っていないような話題を紹介する子どもたちもいた。

又、徳川家康を調べた子どもの発表は「徳川家

康は京都で本能寺の変が起こったとき、堺にいて、家来が少人数だったので、きわめて危険な状態だった。このとき、服部半蔵の意見で伊賀を越え、伊勢の国から海を渡って三河にかろうじて戻った。その後、明智光秀を討つために軍勢を集めて尾張にまで進軍したが、豊臣秀吉によって光秀が討たれたことを知って、天下取りを秀吉に取られた。しかしこのことで服部半蔵を重く用いて、伊賀忍者との関係ができた」などがあった。

上記以外にも「信長は50歳で死んだ」「3人の武将がそれぞれのやり方で天下統一がなされた」「3人の武将が一人でもいなかったら、戦乱が終わらなかった」「明智光秀は、本当は死んでいない」「延暦寺焼き討ちで死んだ人は、僧より女性や子どもが多かった」などの発表もあった。

子どもたちの発表に対し、担任は「先生も知らなかった内容ですね」「興味を引く内容ですね」などのように一つ一つにコメントをおこなった。

また聞いている子どもたちも、それぞれの発表ごとに、よかったところやはじめて知ったことなどについての感想を発表し、交流することを大切にしました。

班や学級の話し合い活動を通じて、お互いの考えを発表しあったり質問しあったりするなど、集団のなかで交流する活動を意識的に取り入れることで、自己の課題や集団の大切さを理解し学び進める姿も見られた。

このように生き方探究教育の視点を意識した活動や支援を取り入れることにより、その時代を生きた人物の生き方と出会う活動がより充実したものになったと考える。これは、前掲表2-2に示した小学校の日本の歴史の学習目標に示された子ども

の姿により近づくことができたのではないかと考える。

さらに、子どもたちが調べ学習をおこなっている段階で、数人の子どもたちから1つの提案が出された。それは、今までに社会科の歴史の学習を通して、時代ごとに年表や時代のまとめを作成してきたが、その一環として、年表ではなく、3人の武将の社会科新聞(図

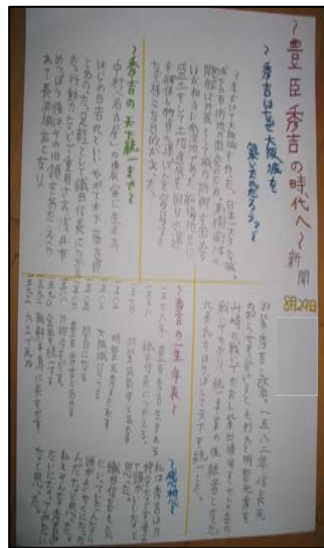


図2-4 社会科歴史新聞

2-4) を作ろうという内容のものであった。

そして、子どもたちは、授業以外の時間も使いながら新聞作りに取り組んでいる姿が見られた。その内容には、「豊臣秀吉は、なぜ大阪城を築いたのだろう」「ほんとうかな、北陸では信長は甥に殺されたという噂がある」などの興味を持つ記事が書かれていた。

このように、子どもたち自らが学習のまとめとして新聞作りを提案し、自分たちで学習を進める姿が見られた。調べたことだけで終わることなく、そこからわいてきた新たな疑問を解決したり、今までの学習をまとめたりと、子どもたちの取り組む内容は様々ではあったが、「意欲的に学習に取り組もうとする姿」が見られたことは、生き方探究教育の視点を大切にされた本単元の取組の成果の一つとしてとらえられるのではないだろうか。

(3) 「3人の武将」の学習のアンケート結果から

授業前後でおこなったアンケートの結果から、生き方探究教育で育てたい力をはぐくむことができたかを分析していくことにした。アンケート結果から、顕著な結果が出たものを紹介する。

①あなたは歴史に興味がありますか

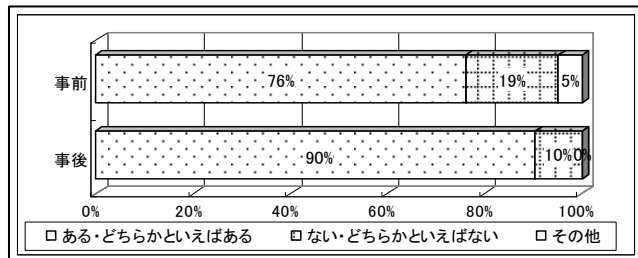


図2-5 歴史に興味がありますか

図2-5は「①あなたは歴史に興味がありますか」の回答結果である。

本単元の学習を始める前は、歴史に対する興味が「ある・どちらかといえばある」が75%であったが、事後では90%とその割合は多くなった。

子どもたちにこの結果について理由を聞いたところ「歴史上の人物がいっぱい出てきておもしろくなった」「歴史を調べたりするのが楽しくなった」「歴史上の人物の生き方がおもしろかった」などの答えが返ってきた。

この単元の学習で、子どもたちは、歴史に対して興味を持ち、歴史上の人物の生き方について関心を持つことができていた。また、調べ学習を通して、調べる楽しさや協力することの大切さを実感させることができたのではないかと考える。

②あなたは3人の武将のなかでだれの生き方に興味を持っていますか（持ちましたか）

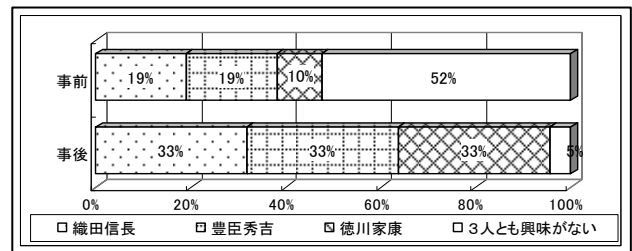


図2-6 3人の武将のなかでだれの生き方に興味を持っていますか（持ちましたか）

図2-6は「②あなたは3人の武将のなかでだれの生き方に興味を持っていますか。（持ちましたか）」の回答結果である。

本単元の学習を始める前は、3人の武将のなかで一人以上の武将の生き方について「興味を持っている」が48%であったが、事後では95%とその割合は多くなっている。

子どもたちにこの結果について理由を尋ねたところ「調べた武将に興味を持った」「いろいろ調べておもしろかった」「調べてみて武将の生き方を知ることができおもしろかった」などの答えが返ってきた。

学習前には、3人の武将の生き方に対してあまり興味を持っていなかったが、学習を通して、多くの子どもたちが3人の武将の生き方について興味を持つことができたと考える。

③あなたは将来の生き方を実現するために3人の武将の生き方が役に立ちましたか

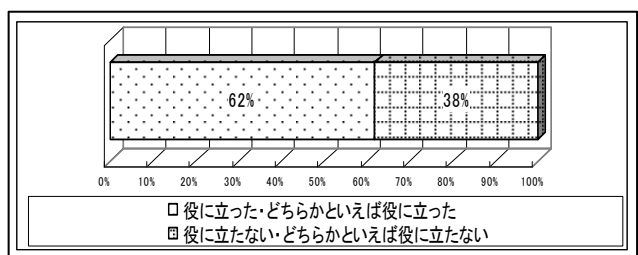


図2-7 将来の生き方を実現するために3人の武将の生き方が役に立ちましたか（事後アンケート）

図2-7は「③あなたは将来の生き方を実現するために3人の武将の生き方が役に立ちましたか」の回答結果である。

これを見ると、3人の武将の生き方が自分たちの将来の生き方について考えるとき役に立ったかを聞いたところ「役に立った・どちらかといえば役に立った」が62%であった。

子どもたちにこの結果について理由を尋ねたところ表2-10のような答えが返ってきた。

表2-10 役に立った・どちらかといえば役に立った

- ・昔の人の生き方を知って、役に立った
- ・将来の夢をかなえるには頭を使わなければならないと思った
- ・いろいろな生き方や性格があることが勉強になった
- ・戦乱の時代を終わらせた武将の生き方は役に立った
- ・自分は、そうしようとは思わないが、3人の生き方は役に立った
- ・自分とはちがうがいろいろな生き方があることを知った

このように、「自分とちがった生き方や歴史上の人物の生き方と出会う」ことは、「自分の生き方を考える」上で役に立ったと考えている子どもたちが多いことがわかった。

一方、「役に立たなかった・どちらかといえば役に立たなかった」と回答した割合は38%であった。

子どもたちにこの結果について理由を尋ねたところ表2-11のような答えが返ってきた。

表2-11 役に立たなかった・どちらかといえば役に立たなかった

- ・自分には関係ない
- ・戦争ばかりで、今は戦争と関係ないから、そんな生き方をするつもりはない
- ・生き方はわかったが、どうしてそういう生き方をしたかわからなかった
- ・それぞれの生き方はわかるが、時代がちがう
- ・戦いが3人の生き方にあったから、今とはちがう

以上のように、3人の武将の生き方はわかったが、「自分には関係ない」「時代がちがうのでまねができない」という意見からは、学習展開において当時の時代背景にまで迫る学習ができていたかどうかを見直す必要あると思われる。

ただ「今の自分と比較しながら」という学習活動を意識したという点においては、自分の将来の生き方について考えるとき、3人の武将の生き方を参考にし、しないにかかわらず、他者の生き方を理解するきっかけをつかむことができたのではないだろうか。

表2-12は、子どもたちに「将来どのような生き方をしたいか」を尋ねた結果である。

表2-12 将来どのような生き方をしたいか

- ・明るく、仲良くなれるような生き方
- ・徳川家康のようなでんとした生き方
- ・みんなのために役立つ生き方をしたい
- ・好きな仕事を一生したい
- ・自立した人に迷惑をかけないように生きたい
- ・みんなの役に立ちたい
- ・協力して助け合いながら生きていきたい
- ・人のために命をかけて働くことができる人
- ・仕事ができ、人に迷惑をかけない人
- ・まっすぐ生きる
- ・人生を楽しく優しく生きたい
- ・みんなの手本になって、人を引っ張っていく生き方がしたい

同じ設問を本単元の学習にはいる前にもおこなったが、その時に答えた子どもたちは、11人であったが、事後では20人とクラスのほとんどの子どもが「自分の生き方」について何らかの回答をした。

この結果からみると、子どもたちは自らの将来や生き方について、この学習をきっかけにして、いろいろと考えていることがわかった。

また、事前では「人に迷惑をかけない」「家族を大切にする」など自分自身に関わる回答が多かった。しかし事後では「みんなの役に立つ生き方」「人のために役に立つ生き方」「人を引っ張っているような生き方」など、自分のことだけではなく、他者とのかかわりについて考えている点が大変興味深かった。3人の武将の生き方との出会いを通して、自らの将来や生き方について考える機会になったのではないだろうか。

このように、アンケートの結果からも、生き方探究教育の視点を大切にした社会科の学習をおこなったことで、子どもたちが自らの将来を考え、人や社会と共に生きる大切さに気づく様子が見えられた。

次に、生き方探究教育の視点に立って、単元の指導計画に基づき、各学習項目における目標にそって、生き方探究教育の学習プログラム枠（例）の『5つの領域・17の力』の視点に立って育てたい力をはぐくむ方向が見られたかを考えた。

まず、「人と共に生きる力」については、調べ学習を通して、調べることの楽しさや共に協力することの大切さを理解する姿が見られた。

次に、「自己の夢をつくり上げる力」については、3人の武将のなかで自分が調べたい武将を考え、選び、調べることで、子どもたちの意欲的に学習に取り組もうとする考え方ができるようになったようである。

また、「情報を集め活用する力」については、情報機器を活用して、多くの情報を集めるようとする姿も見られた。

学習を通して、3人の武将の生き方を学び、自らの生き方と結びつけて考えることができたと考えられる。そして、子どもたちが、歴史に対して興味を持ち、歴史上の人物の生き方について関心を持つことができたのではないかと考える。

アンケート結果からも、学習後では、3人の武将の生き方に対して興味を持つ子どもたちが増えたことがわかった。同時に、3人の武将の生き方を学び、自らの将来や生き方について考えようとする力をつかむことができたと考えられる。

これらの結果からも、生き方探究教育の視点に立って、学習を考えることで、生き方探究教育の『5つの領域と17の力』で育みたい力をはぐくむきっかけをつかむことができたのではないかと考える。

第2節 中学校3年の社会科学習を通して

(1) 子どもたちの実態と中学校3年の社会科の授業

次に、中学校での実践授業について報告する。京都市立大宅中学校3年の子どもたちは、授業中の発言も活発である。また、だれにでも話しかけることができるクラスである。しかし、担任の話では、まだまだ幼い面を持っている子どもも多く、その意味では、自分の将来についてはっきりとした目標を持っていたり、自分の将来についてしっかりとした考えを持っている子どもは少ないとのことであった。

この実態をふまえ、これからの自分の生き方についてじっくりと考えることができるような授業の展開を考えることにした。

中学校の学習で大切にしたいことは、小学校と同じく、一人の人間として、また社会人として自立できる子どもを育てることである。

今回の中学校における生き方探究教育の視点に立った学習を進めるにあたり、授業は、中学校3年社会科の公民分野の社会科公民分野の「一人の人間としてのわたしたち」の単元を取り上げた。表2-13は中学校の社会科公民分野の目標である。また、単元の学習目標は、表2-14である。

表2-13 中学校の社会科公民分野の目標 (23)

- ①個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識させ、民主主義に関する理解を深めるとともに、国民主権を担う公民としての基礎的教養を培う。
- ②民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活について、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深めるとともに、社会の諸問題に着目させ自ら考えようとする態度を育てる。
- ③国際的な相互依存関係の深まりのなかで、世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識させるとともに、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることが大切であることを自覚させる。
- ④現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

この目標を、生き方探究教育の視点に基づいてその意味を読み解いてみる。

例えば、表2-13の目標①の「個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識」することは、表2-4の単元目標(ア)につながっている。これは子どもたちが、社会の現実をふまえながら、自らの生き方を考え、自らの将来の夢の実現を考えさせる活動を通して、将来の実現を設計する力をはぐくむ活動にあたりと考える。このことは、生き方探

表2-14「一人の人間としてのわたしたち」の単元目標(24)

- (7)身近な社会生活に対する関心を高め、課題を設け意欲的に追究させ、よりよい社会生活を営んでいくために、個人と社会とのかかわりについて考えようとする態度を養う。
- (4)身近な社会生活から課題を見だし、個人と社会のかかわりについて多面的・多角的に考察させるとともに、よりよい社会生活について、様々な考え方をふまえて公正に判断させる。
- (9)身近な社会生活とその中にみられる個人と社会のかかわりに関する様々な資料を収集し、学習に有用な情報を適切に選択活用させるとともに、課題を追究し考察した過程や結果をまとめさせたり発表や討論などをおこなったりさせる。
- (1)身近な社会生活の営みについて理解させるとともに、個人の尊厳と両性の本質的平等、社会生活における取決めの重要性、取決めを守ることの意義、個人の責任に気づかせ、その知識を身につけさせる。

究教育で育てたい力である「将来の実現を設計する力」をはぐくむ活動にあたりと考える。

また、表2-13の目標③の「世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識」することは、表2-4の単元目標(イ)につながっている。これは子どもたちが、社会の人々の権利を大切にし、共に生きていることを知る活動を通して、社会と共に生きる大切さをはぐくむ活動ができるのではないかと考える。このことは、生き方探究教育で育てたい力である「社会と共に生きる力」をはぐくむ活動にあたりと考える。

この学習目標にそって、家族や地域・社会などの機能を理解し、人間は本来社会的存在であることに着目させ、個人と社会とのかかわりについて考えさせることに視点をおいた。

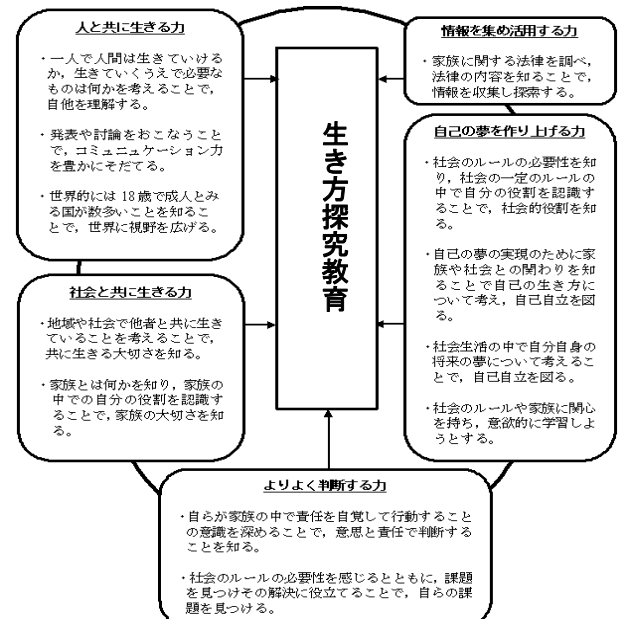


図2-8 目標達成のための単元と育てたい力との関係

そして、この単元における生き方探究教育の視点に立った指導計画（表2-15）を作成し、実践授業をおこなった。

前頁の図2-8に中学校の社会科における目標達成のための単元と育てたい力との関係を示した。この単元の授業においても小学校の授業単元と同じ

く、生き方探究教育で多くの育てたい力をはぐくむことができると考える。

この単元の授業において、生き方探究教育で育てたい多くの力をはぐくむことができるのではないかと考えた。ただし、担任との話し合いのなかで子どもたちの実態を把握し、教材研究を進める

表2-15 中学校3年生社会科学習指導計画（例）（ゴシック体は、特にこの単元で、重点化した生き方探究教育の視点）

学習事項	ねらい	留意点	生き方探究教育の視点	評価規準の具体例
1 個人と現代社会 ① 一人の人間としてのわたしたち ・個人と社会 ・家族と社会 ・法と家族	・人間が本来社会的存在であることに気づくとともに、個人と社会の関わりについて考える。 ・現在の家族における個人の尊厳と両性本質の平等などについて理解する。	・個人が身近な社会集団のなかで、どのようにかかわっているか調べさせる。 ・最も基礎的な社会集団である家族の役割について考えさせる。	I-①人間は一人で生きていけるか、生きていく上で必要なものは何かを考えることで、「自分と他者を理解する力」を育てることができる。 II-⑥自分にとって家族とは何かを知り、家族のなかでの自分の役割を意識することで、「家族と共に生きる力」を育てることができる。 IV-⑩家族に関する法律を調べ、法律の内容を知り自らの生き方と重ねることで「情報を収集し探索する力」を育てることができる。 V-⑮自らの将来展望を考え、家族や社会との関わりを知り、自らの生き方について考えることで「心理的な自己自立を図る力」を育てることができる。 社会生活を送っていく上で大切なことはなんだろう。	関 自らが社会とどのように関わるか、具体的に考えようとしている。 (観察) 技 現代家族に関する資料から、特徴と問題点を明らかにして発表することができる。 (レポート 発表)
② わたしたちと社会 ・社会とルール ・社会と責任	・社会生活におけるルールの意義を理解する。 ・ルールを守ることの大切さと、ルール違反に対しては責任が問われることに気づく。	・家族や友だちどうしの約束事、学校のきまり、交通規則、そして現代の法律に至るまでを考えさせる。	II-④地域や社会で他者と共に生きていることを考えることで、「地域と共に生きる力」を育てることができる。 III-⑨社会のルールの必要性を感じるとともに、自らの課題を見つけその解決方法を考えることで、「自らの課題を見つけ解決する力」を育てることができる。 V-⑬社会のルールの必要性を知り、社会の一定のルールのなかで自分の役割を認識することで、自らの生き方と重ね合わせることで、「自分の社会的役割を認識する力」を育てることができる。 もしルールがなかったら、わたしたちの社会はどうなるだろう。	思 社会にあるルールを取り上げて、それがつくられた目的について考察している。 (発表 レポート) 知 慣習・道徳・法の内容と違いについて理解している。 (ワークシート)

なかで、今回の学習では17の力を育てるところを、特に2～3の力に限定することにした。

実践授業を進めるにあたり、子どもたちの意識を把握するために授業の事前及び事後のアンケートをおこなうことにした。

アンケートの設問項目は、下記の表2-16である。

表2-16 授業前・後アンケートの設問項目

1. あなたは一人で生きていけると思えますか
2. あなたにとって家族どのような存在ですか
3. 家庭で何かあなたの役割(家での仕事など)がありますか
4. 家族に関する法律を知っていますか
5. 社会にルールは必要だと思いますか
6. あなたは将来やりたいことやつきたい仕事などをもっていますか
7. あなたの夢の実現のために家族や社会の手助けが必要だと思いますか
8. 将来どのような生き方がしたいですか

授業は、アンケートの設問内容と関連させながら学習を進めることにした。そして発問内容や板書、資料などを通して、自分の将来像について考えることができるような工夫を取り入れた授業をおこなった。

授業では、子どもたちの発表や発言などを通して、子どもたちがこの授業において、生き方探究教育で育てたい力を身につけることができたか、どのように変容したかを見ることにした。

授業事前・事後のアンケートを取り、生き方探究教育で育てたい力を育てることができたか、どのように変容したかを見る。



図2-9 事前アンケートの記入風景

(2) 「一人の人間としてのわたしたち」の学習を通して

「一人の人間としてのわたしたち」の学習単位では、「人間が本来社会的存在であることに気づくとともに、個人と社会の関わりについて考える」「現在の家族における個人の尊厳と両性本質的平等などについて理解する」というねらいがある。

子どもたちに、社会生活を送る上で大切なことは何かを考えながら、自分の将来について考える活動を取り入れた。

ア 1時間目の授業

1時間目の授業では『婚姻』を題材とし、「人は一人で生きていけるか」というテーマで話し合う場を設定することで、自らの人生設計について考えることができるようにした。

図2-10は資料として配付した『婚姻届』の一部である。

実物の婚姻届を見せることで、興味を持たせ、自らの人生設計を考えさせるとともに、「情報を収集し探索する力」を育てる。

婚 姻 届		受理 平成 年 月 日	発 送 平成 年 月 日		
		第 号	第 号		
平成 年 月 日 届出		送 付 平成 年 月 日	長 印		
第 号					
長 殿		婚姻届生	戸籍記載	記載調査	別 表 第 欄
		住 民 票	通 知		
(1)	氏 名	夫 になる 人		妻 になる 人	
	氏 名	氏 名	氏 名	氏 名	氏 名
	生 年 月 日	年 月 日		年 月 日	
	住 所				

図2-10 学習ワークシート(婚姻届の一部)

まず、子どもたちに「結婚についてどのように考えていますか」という発問をおこなった。多くの子どもたちからは「まだ早い」「結婚については考えていない」「まだまだ先の話」のようななどの答えが返ってきた。

次に「結婚は何歳になればできるのでしょうか」と問いかけた。するとすぐに「男性は18歳、女性は16歳」と答えが返ってきた。女子では、早ければ1年後には、16歳となるため、法律上結婚が可能になる。しかし、その事実は何となく知っているが「自分たちのこととは思っていない」「あまり意識していない」という女子生徒の声が多かった。また、一部の子どもたちからは「あまり結婚したくない」「人生のなかで結婚は大切なことではない」「結婚しなくても、一人で生きていける」という発言もあった。

次に、教科担任から教科書に記載されている夫婦別姓について「夫婦別姓を知っていますか」と子どもたちに問いかけてみた。この内容については「わからない」という声が多く、なかには「関係ない」など、あまり関心が無い様子も見られた。このように「あまり関心がない」という意見が多くあがっていたが、話し合いを進めるなかで、以下のような疑問の声が上がってきた。「なぜ結婚年齢が男女で違うのか」「国によっても結婚可能な年齢が違う」などの発言も出てきた。

少しずつではあるが、『婚姻』についての知識を得ることや、自分の将来について考えることを通して、『婚姻』について真剣に考えようとする子どもたちの姿が見られるようになってきた。

この授業を通して『婚姻』という題材を通して子どもたちに意見を述べさせ、そして、家族の大切さについて考えさせる活動を通して、自らの生き方を考え、人は一人では生きていけないものがあり、社会で協力し合って生きていることを知ることができたのではないだろうか。

そして、将来の自分の姿について真剣に考えることができる学習となったのではないだろうか。

イ 2時間目の授業

次に「わたしたちと社会」の学習項目では、「社会生活におけるルール of 意義を理解する」とねらいが示されている。

そこで教科担任から「ルールがなかったら、わたしたちの社会はどうなるだろう」と発問をおこなった。すると「社会はめちゃくちゃになる」「犯罪が多くなる」「自分勝手な人間が多くなる」などの社会が乱れることを危惧する声が出てきた。しかし、一部には「いいんじゃない」「楽かもしれない」などの答えもあり、ルールの必要性や重要性をあまり認識していない実態があった。

そこで、ルールの必要性を考えさせると共に自分の人生設計について考える活動を設定した。

授業では「民法」を取り上げ、『相続と親等』に関する学習をおこなった。「相続」の学習では、相続のルールについて、子どもたちもよく知っているマンガの家族の例を図の学習プリントを準備した。

教科担任から「相続について知っていますか」と問いかけると「知っている」という声が多かった。しかし一部には「親の財産がもらえる」「たくさん残してほしい」など活発に意見交流をする姿が見られた。しかし、上記の発言のように、親の財産を「もらえる」という意味でとらえているようであった。

ウ 3時間目の授業

ここでは『親等』についての学習をおこなった。教科担任から「親等について知っていますか」と問いかけた。すると「親戚のことかな」という答えが返ってきた。多くの子どもたちにとって『親等』という言葉はなじみが薄いものだったようである。これについては、想定される結果であった

ので、事前に、2時間目で使った子どもたちがよく知っているマンガの家族の例を図と同様の学習プリントを準備していた。

そして、用意した家族の図を使いながら、家族と親族の関係や婚姻によって親族が増えることを学習した。学習シートを準備し「親は何親等になるのか」「兄弟は何親等になるのか」について図に書き込む活動を通して理解を進めることができた。

次に、『相続と親等』の関係をを通して社会生活を送る上でのルールについて学ぶ活動を設定した。ここでは相続の分配方法について図に表したものを用意し、みんなで一つの図を見ながら学習が進められるようにした。

親族ならだれでも均等に分配されるのではなく、家族を中心に、血縁関係の深いものから分配されるルールを初めて知り、驚いている子どもたちもいた。ここでも、マンガの家族を例にあげて説明することで、子どもたちは、親しみやすかったようである。

今回の実践授業では、従来からの学習指導計画を、生き方探究教育の育てたい力の視点に立って、整理し、実践することで、自らの生き方を考えさせる授業にすることができた。そして、人や社会と共に生き、一人の人間として自己実現を図るために、今後の生き方探究教育の視点に立った取組について検討することができたと考える。

(3) 「一人の人間としてのわたしたち」 の学習のアンケート結果から

事前・事後でおこなったアンケートの結果から、生き方探究教育で育てたい力をはぐくむことができたかを考え、分析していくことにした。事前・事後でおこなったアンケート結果の一部を紹介する。

①あなたは一人で生きていけると思えますか

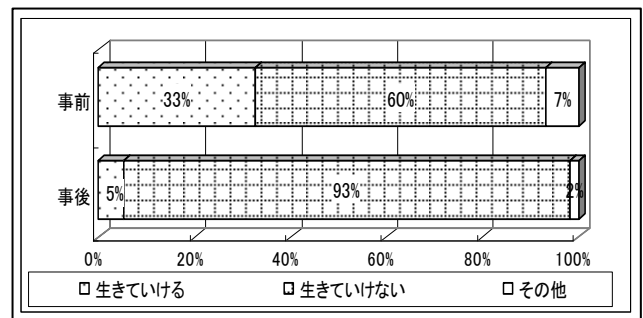


図2-11 一人で生きていけると思えますか

図2-11は「①あなたは一人で生きていけると思えますか」の回答結果である。

事前では、「生きていける」が33%であったが、事後では5%と少なくなっている。一方「生きていけない」と回答した割合は事前では60%であったが、事後では93%と多くなっていた。

子どもたちにこの結果について理由を尋ねたところ、以下のような答えがあった。

- 「協力して生活を営んできた」
- 「学習して一人で生きることの難しさを知った」
- 「何をするにも助けが必要だと感じた」
- 「人は支え合って生きていることがわかった」

『相続』『親等』の学習を通して、子どもたちは、多くの人や社会でお互いに支え合い、様々な人とコミュニケーションを図り、協力して生きていることについて、理解できたと考える。

このような学習を通して、様々な人々と協力・共同してものごとに取り組む姿が期待できるのではないだろうか。

②あなたにとって、家族とはどのような存在ですか

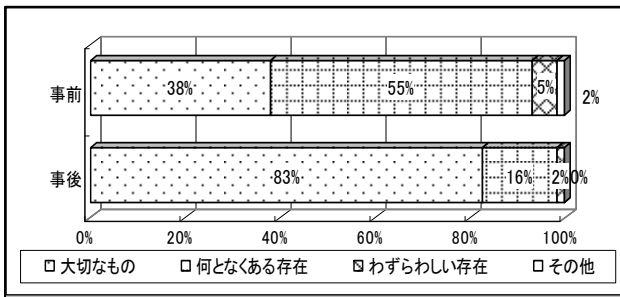


図2-12 家族の存在とは

図2-12は「②あなたにとって、家族とはどのような存在ですか」の回答結果である。

事前では、「家族は大切なもの」が38%であったが、事後では69%と多くなっている。また「何となくある存在」と回答した割合は事前の55%であったが、事後では16%と少なくなっていた。

子どもたちに「大切なもの」と回答した理由について尋ねたところ、以下のような回答があった。

- 「今まで意識しなかったが、勉強して親や兄弟に助けられていると思った」
- 「家族にいろいろ面倒をみてもらっている」
- 「話を聞いてくれる」
- 「怒られるけど大事な存在」
- 「家に帰るとほっとする」など

このことは、今回の学習を通して、家族とは「やさらぎの場」であることを知った結果ではないだろうか。

そこで、人が生きていく上で家族は大切なものであり、家族と共に協力して生きていることの大

切さや、自らが生活する地域や社会でのふさわしい生き方、社会貢献など、共に生きていくために必要なことについて、理解できたのではないかと考える。

③家族に関する法律を知っていますか

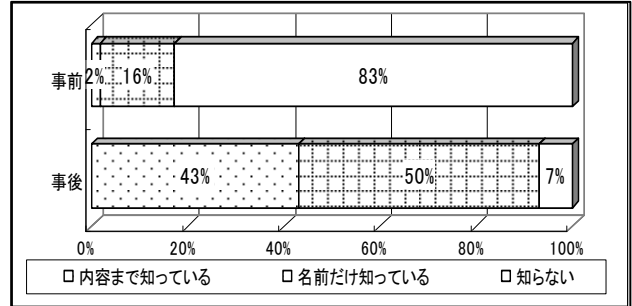


図2-13 家族に関する法律を知っていますか

図2-13は「③家族に関する法律を知っていますか」の回答結果である。

この結果から明らかなように、事前では、家族に関する法律を「内容まで知っている」「名前だけ知っている」と回答した割合を合わせると、18%であった。しかし、事後では98%とその割合は多くなっている。

また、子どもたちの声からは「自分にとって必要な法律だと思った」「民法に興味を持った」のような答えが返ってきた。

次に、定期テストにおいて、「家族は、社会集団のなかでも、愛情と信頼で結ばれた最も小さな基礎集団である。この家族に関することが書かれている法律は何でしょうか」という問題に答えさせた。その解答（図2-14）では、「民法」と答えた子どもたちが92%、憲法と答えた子どもたちが3%、その他の解答した子どもたちは無く、無答が5%であった。

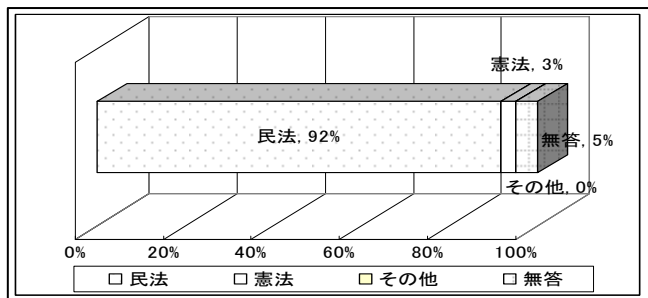


図2-14 家族に関することが書かれている法律は何でしょうか
(定期テストの解答より)

この結果から子どもたちは、授業で「民法」について学習したことで、多くの情報を得て、自分の将来設計について真剣に考えようとする姿が期待できる。

④あなたは将来やってみたいことやつきたい仕事などを持っていますか

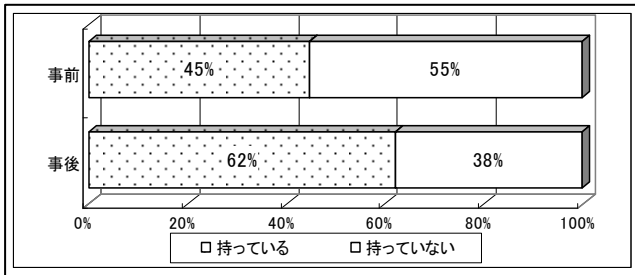


図2-15 将来やってみたいことやつきたい仕事

図2-15は「④あなたは将来やってみたいことやつきたい仕事を持っていますか」の回答結果である。

事前では、「持っている」と回答した割合は45%であったが、事後では62%と多くなった。

事後アンケートで「持っている」と答えた子どもたちに「どんな仕事をしてみたいと思っていますか」と仕事の内容を尋ねたところ、「看護師」「トリマー」「パテシエ」「建築士」「プログラマー」「会社経営」などの回答があった。

また「持っていない」と答えた子どもたちにその理由を尋ねたところ「迷っているところ」が最も多かった。

一方で「仕事をしたくない」「やりたい仕事がない」「働かなくても食べることができる」と答えた子どもたちもいた。このことは、今までに、子どもたちに、働くことへの意欲を持たせたり、魅力を感じさせたりするような働きかけが十分にできていないことが原因の一つとして考えられる。

他の設問において、「家ででの自分の役割」について聞いたところ、半数近くの子どものたちは役割を持っていて「家事・風呂洗い・犬の世話」などをあげた。

表2-17は「将来どのような生き方をしたいか」について記述式で尋ね、回答結果について主なものを掲載した表である。

表2-17 将来どのような生き方をしたいか（一部抜粋）

- ・この人生が楽しかったなと思える生き方をしたい
- ・友だちがいっぱい作れるような生き方がしたい
- ・人の役に立てるような仕事をしてみたい
- ・なんでも話し合えるような家族を作りたい
- ・しっかりした仕事につき、親から自立して生きたい
- ・笑顔がたえない人生を送りたい
- ・自立し後悔しない人生を送りたい
- ・人に迷惑をかけないように自立して人生を送る
- ・親から自立し、自分らしさを出したい
- ・一人で何でもできるようになりたい
- ・世の中の役に立てるような大人になりたい
- ・責任を持って、慕われるような人になりたい

この回答では、「なんでも話し合えるような家族を作りたい」「世の中の役に立てるような大人になりたい」など、学習を通して人や社会と共に生きることの大切さを知った結果ではないだろうか。

また、「自立し後悔しない人生を送りたい」「一人で何でもできるようになりたい」など「自立して生きたい」などと考えていることは、学習を通して、一人の人間として社会人として自立し、自分の将来についてはっきりとした考えを持つことができた結果ではないだろうか。

そして子どもたちは、「家族や他者、社会と共に、明るく楽しく生きたい」などの生き方を望んでいることもわかった。

以上のアンケートの結果からも、生き方探究教育の視点に立って授業をおこなったことで、子どもたちは、自らを知り、自らの将来を考え、人と共に生きる大切さを学習しようとする姿が見られた。

次に、定期テストで「わたしたち一人一人が人間らしく生きていくためには何が大切でしょうか」という問題を出題した。

このテーマについては授業において、子どもたちと学習し、話し合わせた結果もあり、子どもたちの96%が回答した。

図2-16は、その回答例である。

私	た	ち	人	間	が	生	き	て	い	く	た	め	に	は	,	誰	も	が	幸
せ	に	生	き	た	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。	し	か	し	人	間	は
一	人	で	は	生	き	て	い	け	ま	せ	ん	。	み	ん	な	の	助	け	合
い	が	あ	る	か	ら	こ	そ	,	人	間	ら	し	く	生	き	て	い	け	る
と	私	は	考	え	ま	す													

図2-16 「わたしたち一人一人が人間らしく生きていくためには何が大切でしょうか」解答例

このように、「人間は一人では生きていけません。みんなの助け合いがあるからこそ、人間らしく生きていける」と回答していることは、学習を通して、人は一人では生きていけない、家族や地域と共に生きる大切であることを学習した結果ではないだろうか。

図2-16以外にも「人は一人では生きていけないから、一人一人を大切に、助け合いをするのが重要である」「相手の気持ちを考えることが大切である」「自分のことだけ考えるのではなく、周りの人の気持ちを考えることが大切である」「みんなが助け合うからこそ人間らしく生きていける」「自分

自身が自立し、他人を思いやる心を持つ」などの答えが多かった。生き方探究教育の視点を大切にしたい授業に取り組むことで家族や地域そして社会と共に協力して生きることが大切であると考えることができていたのではないだろうか。

社会科で、生き方探究教育の視点を大切にしたい授業をおこなった。その結果、子どもたちに一人で生きていくことができるかを考えさせたとき、事前と事後ではあきらかに意識が変わり、多くの人や社会と共に協力して生きていることが理解できたのではないかと思われる。

また、子どもたち自身にとって家族の存在とは何かを考えさせたとき、事後では「家族は大切なもの」と考える子どもが増えた。この学習を通して、自分たちにとって家族とは大切なものであり、家族と共に協力して生きていることが理解できたようである。

今回、小学校・中学校での授業で取り上げた社会科の学習は、従来から小・中学校でおこなわれてきた内容である。従来の授業形態での学習を通して、生き方探究教育の視点に立って育てたい力を整理し、学習展開を工夫した。このことで、指導者はもちろん子どもたち自身も学ぶ意味や価値をとらえ、自らの生き方を探る意識を持つ姿が見られた。

引用文献

- (19) 前掲(6) 2004.1 p.6
- (20) 前掲(4) 2004.1 p.6
- (21) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画 社会科』2005.3 p.6-社-5
- (22) 前掲(21) 2005.3 p.6-社-16
- (23) 京都市教育委員会『京都市立中学校教育課程 指導計画 社会』2006.3 p.98
- (24) 前掲(23) 2006.3 p.114
- (25) 前掲(4) 2004.1 p.6

第3章 すべての子どもたちの未来を拓く

生き方探究教育を進めるにあたって

第1節 生き方探究教育と教育活動

(1) 生き方探究教育と進路指導

本市では、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などあらゆる教育活動を通して、基礎・基本をしっかりと身につけさせ、豊かな人権感覚と確かな学力を身につけさせ進路保障を図ってきた。

第1章でも示したが、生き方探究教育を考えると、中学校の学習指導要領では「進路指導」につ

いて示している。また小学校の学習指導要領では「進路指導」という用語は用いられていないが「生き方」という言葉を用いて、子どもたちが将来について考える機会を設けるように示している。

これまで進路指導は、社会の動きに合わせながら、できるだけ個人の希望がかなえられるように取組を進めてきた。しかし、子どもたちの意識調査では「将来何になりたいか」という問いに対し「特にない」「何でもよい」と答える子どもの割合が多かった。子どもたちが目的意識を持たず、何でもよいとって時代に流される生き方は決してよいとは言えないだろう。子どもたちが、自らの生き方を考え、どう生きていくのかを主体的に考えることができるように指導していくことが求められている。

また、子どもたちに「自分の人生」「自分の将来像」「働くこと」などへの関心・意欲を高め、学習意欲を向上させることも大切である。

子どもたちに「君はこう進むべきである」「このように生きる必要がある」など強制するものではない。

子どもたちを進学させていくことだけが進路指導の目的ではない。子どもたちが自分の将来を考える上で、どのような道があるかを考えさせることが大切であると考えられる。

また、子どもたちに、人としてどう生きるのかについて考えさせ、自らの生涯の在り方について自覚させることを、目指すものである。

そして、子どもたちに、目先の中学校、高等学校での進路指導から小学校段階から、子どもたちの発達にあった「生き方」を考える点に重点を置く必要があると考える。

このように、将来を見据えた進路指導こそが、生き方探究教育の視点に立った進路指導であると考える。

(2) 本市の教育活動のなかでの実践例

前章で、小・中学校の社会科の授業での、生き方探究教育の視点に立った学習について報告した。次に本市の取り組んできた、生き方探究教育の視点に立った学習の一例として「生き方探究・チャレンジ体験推進事業」(以下 チャレンジ体験とする)について報告する。

本市チャレンジ体験は、平成12年度より中学生に、自ら学び、自ら考える力など「生きる力」を身につけるとともに、集団や社会の一員としての自らの在り方を見つめ、自らの生き方を考えるよ

う支援してきた。この取組は、地域・社会や保護者の協力を得て「生きる力」をはぐくむとともに、他者に対する感謝や思いやりの心を育み、自立し、共に生きることに重きを置いている。

そこで、京都市立大宅中学校において、11月6日～10日の5日間のチャレンジ体験を観察した。チャレンジ体験の流れを図4-1に示す。

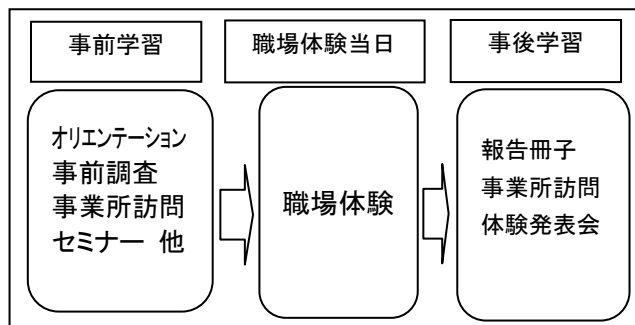


図4-1 生き方探究・チャレンジ体験の学習の流れ

図4-1の学習の流れで、チャレンジ体験の生き方探究教育の視点に立った指導計画（例）を作成した。以下に指導計画（例）（表4-1）で、チャレンジ体験における、生き方探究教育で育てたい力を示した。

表4-1 チャレンジ体験と生き方探究教育の関係例（一部抜粋）

活動項目	留意点	生き方探究教育で育てたい力(例)
⑥【セミナー】 職業人の 生き方講 話 あいさつ マナー	働く意義を 身につける 礼儀・作法・ マナーなどを 身につけさせ る	・体験を通して人と接することで「人と共に生きる力」と「社会で共に生きる力」を育てるきっかけをつかむことができる ・仕事の大切さや楽しさ・苦しさを 知ることにより「よりよく判断する力」を 育てるきっかけをつかむことができる
⑨【体験】 職場体験 日誌の記 入 反省会	体験を通し て仕事の大切 さを知る 日誌を記入 し反省させる	・コンピュータを使ってプレゼンをおこなうことにより「情報を集め活用する力」を育てるきっかけをつかむことができる ・体験で得たことを伝え、生き方を考えることで「自らの夢を作り上げる力」を育てるきっかけをつかむことができる

体験場所としては、地域の商店・スーパー、保育所・幼稚園、病院等で、地域に希望する職種がない場合は、京都市全域から探した。

子どもたちに働くことの意義や職業について理解させる指導をおこなった。その一例として「な

ぜ働くのか」についての講話やマナーや言葉遣いについての研修を受けた。子どもたちにとっては、なかなか使わない言葉やマナーが多く「ありがとうございます」の一言が、なかなかうまく話せなかった。

そこで体験日に、各事業所を訪れる大宅中学校の教職員に同行し、子どもたちの様子を観察することにした。

以下にその様子を簡単に示す。（表4-2）

最初は、学校では大きな声ではきはきと行動している子どもでも緊張し、立っているだけで「いらっしゃいませ」の一言が出なかった。また、緊張し体調を崩してしまった子どもたちもいた。また、事業所の方に助けられ、何とか1日を終えることができていた。帰宅時に感想を聞くと「短かった。緊張して覚えていない」と返ってきた。感想からも、子どもたちは、働くこと、人と接することの難しさを感じることができたと考える。

体験中頃には、子どもたちも、仕事に少しは慣れ、大きな声が出るようになった。店内の掃除や商品を並べ、指示されたことを一生懸命おこなう姿を見て安心した。子どもたちの対応力のすばさも感じた。店の方からは「3日たてば動きはわかります。でもこれからが大変。失敗するし、お客様を怒らせることも。今後働くときには必ず経験します。そのときは、一人に対応するのではなく、スタッフといっしょに対応し、共に働いていることを知り、何事にもプラスに考えてほしい」と話された。

最終日には、あきらかに笑顔が戻ってきた。あいさつもでき、一人の店員と感ずることができた。

表4-2 チャレンジ体験の子どもたちの様子の記録（一部例）

事後のアンケートから、自分の将来に向けてよい体験になったかの設問では、「大変よい経験になった」「ある程度よい経験になった」と答えた子どもたちが90%であった。

感想からも「働くことの意義、ルールやマナーが分かった」「将来を考える場となった」「将来に対する展望が持てた」「夢の実現の厳しさを知った」などの声があった。

また「あいさつなどをする習慣ができた」「地域の活動への積極的な参加しようと思う」などの感想も出てきた。

チャレンジ体験で子どもたちが経験したことは、これからの生き方について、考えさせるよい機会になった。この体験で得た様々な情報や経験は、

今後、子どもたちが自身の生き方を考える上で大きな支えになると考える。



図4-3 チャレンジ体験（パテシエ体験）

今後もチャレンジ体験が、単なるイベント的な学習にとどまることなく、次の学習に生きて作用するような「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育の推進につながる教育活動になると考える。そして、内容の向上と系統的な活動に工夫を凝らしていくことが必要である。

第2節 自己実現に向けたさらなる充実

（1）自己実現に向けた生き方探究教育

本市の生き方探究教育（試案）では、「本市が一貫して「個の尊重」を目指して取り組んできた人権教育は、今次教育改革が求める『画一的・形式的平等から「個」の尊重へ』の実現にほかならず、共生と自立のための諸能力を高め、自己実現を目指す『生き方探究教育』の方向と軌を一にするものである」と言える。つまり『生き方探究教育』は本校の教育活動を見直し、教育課程の改善を促すことであり、本市が重視している人権教育を個のキャリア発達という視点から発展的に捉え直すことでもある」（26）と示している。これは、子どもたちが一人の人間として将来について考え、自立し、社会と共に生き、自己実現をめざす、生き方探究教育の視点と重なり、人権教育を支えている部分とも重なっていることが見られた。

本市では、子どもたちが学校教育を受けること自体が人権であるという視点に立ち、個に応じた指導の徹底を図り、わかる授業と進路の保障を目指す取組をおこなってきた。そして、子どもたちが、すべての教育活動を通して、自らの生き方を考え、社会と共に生きていけるように取り組んできた。

以上のことから、本市では「地域・社会との関

わりのなかで生き方を考え、生きる力を育む」を目指し、主に勤労観・職業観を育むことを図ることを目的とした「キャリア教育」から、自らの将来像を描き、自己実現に向けて、豊かな人間性を育て、個としての自立や他との共生を促す「生き方探究教育」と示した。

そこで、生き方探究教育を進めるにあたっては、子どもたち一人一人の発達を支援し「生きる」とは何かを考え、学習意欲の向上と確かな学力の向上を図ることが大切であると考ええる。

そして、生き方探究教育は「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」ことに視点をおき、自己の生き方を考え、意欲・能力や態度を育成する教育と言える。

一人の人間として必要な資質や能力を高め、将来の自分を描き、自己実現に向けて、豊かな人間性を育てることが大切であると考ええる。

子どもたちが、自己実現に向けて生き方探究教育を進めるにあたっては「学習プログラム枠組み例」を参考に、すべての教育活動において一貫した取組に、生き方探究教育の視点を取り入れた指導をおこなう必要があると考ええる。

（2）成果と課題

「生き方探究教育」を進めるにあたって、すでに取り組まれてきた内容も含め、子どもたち一人一人に豊かな人権感覚を身につけさせ、基礎・基本を大切に、確かな学力を身につけさせるような取組をさらに充実させることが大切である。

本研究は、本市が考える「生き方探究教育」の一つの取組例を示すものである。

今回、本研究を進めていくなかで、学校におけるすべての教育活動を「生き方探究教育」の視点に立って見ることは、子どもたちが自分を好きになり、何事にも前向きに行動し、人や社会と共に学び、高め合う活動を生み出すことになるのではないかと感じた。

そして「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」という目標を持つことで「自立した社会人」になるために、自分の将来について考えさせるきっかけをつかむことができた。このことは、決して生き方探究教育だけをおこなえばできることではない。子どもたちが、学校や地域・社会における様々な取組や活動によっても得られると考える。子どもたちが生活のなかで、友だちや家族と共に地域などの様々な取組や活動に参加することで、お互いを認め合うことができる。また、子どもたちが、

地域や社会のなかで一人の人間として自立し、人を大切にし、自分を大切にすることを通して、自己実現していくことを実感させる糸口をつかむことができると思う。

また、子どもたちが様々な集団のなかで、共に学びあい、共に生きる力を築き、子どもたちが自ら学び進めることができるような学習を進めることが、大切であることもわかった。子どもたち一人一人に目標を持たせ、人々とのかかわりのなかで自分自身の将来展望を持ち、何事にも前向きに取り組む意欲を育てることが大切である。

本年1月19日に「京都まなびの街 生き方探究館」内に開設された「京都市スチューデントシティ・ファイナンスパーク」の学習は、生き方探究教育の一環をなすものとして実施している。今後この学習とすべての教育活動との系統性を持ち、生き方探究教育を推進していく必要であると思う。

これまでの研究で、上記のような新しい分野の取組を進めると共に、今までのすべての教育活動そのものを進めることも大切であると感じた。

しかし、ただ従来通りの学習を進めていくのではなく、指導者自身も自らの生き方を考え、見直し、生き方探究教育の意味を理解することが大切である。また、子どもたち一人一人を大切に「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育の視点に立って、子どもたちを育てる意識を持つことが大切であると思う。

そして、子どもたち一人一人の生き方や将来の進路を見つめ、10年後、20年後、50年後の将来を見据えた生き方を支援していくことが必要であると思う。

(26) 前掲(1) 2006.2 p.13

おわりに

本研究を進めてきて、生き方探究教育は、何も特別で新しい教育活動だけをおこなうのではなく、これまでおこなってきたすべての教育活動を通して、子どもたち一人一人を大切に「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育の視点に立って、育てることが大切であると思う。

しかし、ただ従来通りの教育活動を進めていくのではなく、子どもたち個々の発達を支援することが大切である。そして、一人の自立した社会人として、将来を担う子どもたちを育てるという意識を持っておこなう必要がある。

また、これまでの進路指導から生き方探究教育へどこまで意識して進路指導を進めていくかも大切であると思う。

筆者自身、中学校現場で担任を受け持ち、進路指導をおこなったとき、1年生段階から将来を見据えた進路指導を始めることが、大切であると考えていた。また、子どもたちの職業意識、将来展望を基に、進路先を決めることが大切であると考えていた。そして、そのような進路指導を心がけていきたいと考えていた。

しかし、現実には進路指導は、3年になってからになりがちで、子どもたちの職業意識や将来展望に沿った進路指導を考えてはいるが、まず高校に進学させることを優先させ、その子どもの成績にあった高校を紹介し、目前の受験のみに対処していた。言い換えれば、とにかく高校へ進学させることが、子どもたちの将来展望を切り開かせる第一歩であると考え、進路指導をおこなってきた。

事実、高校進学後に自らの将来を考え、自己の夢に向かって努力した子どもたちも少なくない。しかし、もっと早い段階から子どもたちに、自らの将来展望を考えさせ、より広い視野で将来像を考えさせることができたのではないかと考える。

そこで、すべての教育活動において、子どもたちに何を身につけさせたいか、何を考えさせたいかを見据えて進路指導を進めることが大切であると思う。

今後、本研究の成果を基に、取組を推進していくとともに、生き方探究教育をどのように子どもたちに働きかけていくかが課題である。これまでの教育活動において、生き方探究教育の視点を意識することで、これまでになかった効果が期待できると考える。

生き方探究教育は、はじまったばかりで、多くの課題がある。しかし、すべての子どもたちの未来を拓くために、生き方探究教育が推進され、定着した教育活動となることが大切であると思う。そして、学校での活動はもとより、家庭や地域・社会とも連携を取りながら、子どもたちの生き方について支援していくことが必要であると思う。

最後に、研究を進めるにあたって、協力していただいた、京都市立養正小学校6年・京都市立大宅中学校2年・3年の皆さん及び各校の研究協力員の先生方に感謝したい。また、チャレンジ体験で各企業周りに同行していただいた、京都市立大宅中学校の矢野保美先生をはじめ、両校の教職員の方々に感謝したい。

小学校6年 生き方探究教育の年間指導計画（例）

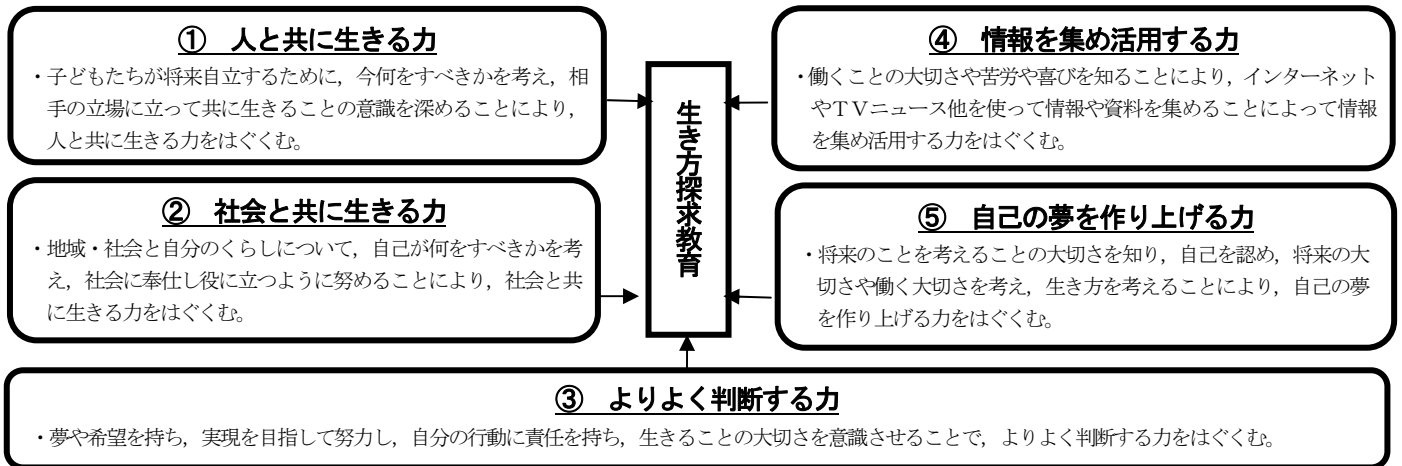
1. 生き方探究教育の目標

自ら学び、自らが意志決定して行動する力は、「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育を考える上で重要だと思われる。そこで、各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から、人間としての生き方を見つめさせ、自己の現在及び将来の生き方を考える。

2. 生き方探究教育の学年目標

- ①自己を認め、将来の夢のイメージをつくる
- ②働くことの大切さや苦労や喜びを知る

3. 生き方探究教育にかかわる「5つの領域」



4. 生き方探究教育 年間指導計画(例)

(○数字は単元で育てることができる、生き方探究教育の5つの領域)

月	教科	総合的な学習 (活動例の1つ)	道徳	特別活動	
				学級活動	児童会・クラブ活動・行事
4	家庭「生活時間を見直してみよう」④ 理科「私たちがとりまくかんきょうと生活」⑤	【私たちの町の伝統産業】 ①②③④⑤	礼儀作法①②③ 男女仲よく①②③	最上級生になって①②③	始業式 入学式①②③ 家庭訪問②③⑤
5	図工「私の町」②④ 国語「暮らしの中の言葉」①	・地域の伝統産業を調べよう ・地図を作ろう	楽しいおしゃべり①② みんなの言い分③	楽しい修学旅行 ①②③④⑤	朝会①②④⑤ ごみゼロ運動①②③
6	音楽「世界の音楽に親しもう」① 社会「日本の歴史」④⑤	・計画を立てよう ・調べに行こう	友を思う心①②③ 目標に向かって⑤	仲間づくり①	朝会①②④⑤ 修学旅行①②③④⑤
7	家庭「つくろう！さわやか生活」②⑤ 算数「計算の見積もり」③④⑤	・発表に向けてまとめてみよう ・発表会	役割を自覚して①③⑤ はげまし合う心①②	家での役割②⑤ 夏休みの生活①②③④⑤	朝会①②④⑤
8	理科「自由研究」③④⑤				
9	国語「共に考えるために伝えよう」①③ 図工「夢をあつめて」③④	【人権ゆかりの地をたずねよう】 ①②③⑤	男女協力①② わたしの家族①②	将来の夢①③⑤	朝会①②④⑤ 運動会①②③④⑤
10	社会「世界に歩み出した日本」③④⑤ 図工「地球アート」④	・本や冊子を見て調べよう	かががえのない命③⑤ 郷土を守る②	秋の遠足①②③④⑤	終業式・始業式①②③ 遠足①②③④⑤
11	国語「覚えておきたい言葉」①③ 体育「サッカー」①②③	・調べに行く計画を立てよう	公正・公平に①③ 志に向かって③⑤	学芸会①②③⑤	朝会①②④⑤ 学芸会①②③⑤
12	国語「聞き手の心に届くように発表しよう」① 音楽「日本の音楽を味わおう」①②	・調べる内容を検討しよう	誠実な生き方①③ 相手を思いやる①②	人権週間①③⑤ 冬休みの生活①②③④⑤	朝会①②④⑤
1	社会「私たちの生活と政治」③④⑤ 算数「2つの数で割合を表そう」④	・実際に調べに行こう ・話を聞いてみよう	助け合って生きる①②③ 自由の心と責任①③⑤		朝会①②④⑤ 避難訓練①②③
2	社会「世界の中の日本」④⑤ 家庭「伝えよう！ありがとうの気持ち」①③	・調べたことをまとめてみよう	隣の国の人々と②	公共物を大切に②③ 感謝の気持ち①②③	朝会①②④⑤ クラブ発表会
3	算数「みらいへのつばさ」④ 英語活動「20年後の私」①⑤	・学習したことを形に残そう ・発表会	感謝する心①③ 国をおもう心②	卒業に向けて①③⑤	朝会①②④⑤ 卒業式①②③⑤

*平成17年度京都市立小学校学習計画・指導要領等を参考に作成した。各学校では独自の指導計画を作成することが望ましい。

中学校3年 生き方探究教育の年間指導計画（例）

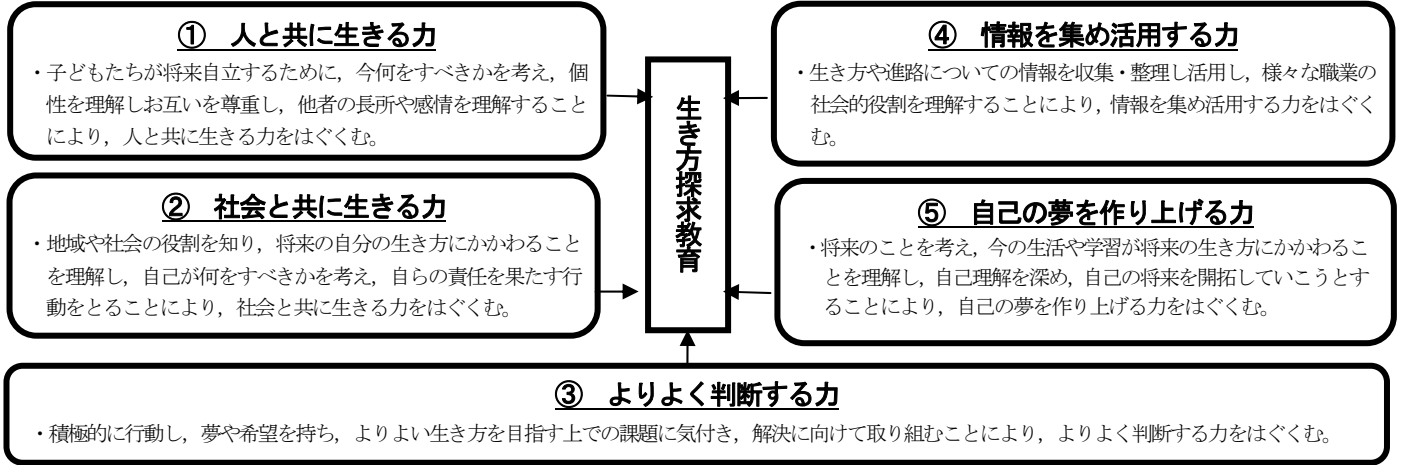
1. 生き方探究教育の目標

自ら学び、自らが意志決定して行動する力は、「生き方を考え、生きる力をはぐくむ」生き方探究教育を考える上で重要だと思われる。そこで、各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から、人間としての生き方を見つめさせ、自己の現在及び将来の生き方を考える。

2. 生き方探究教育の学年目標

生き方についての自覚を深め、望ましい職業観や希望を持ってその実現に向かって努力し、主体的に進路選択ができる能力を育てる。

3. 生き方探究教育にかかわる「5つの領域」



4. 生き方探究教育 年間指導計画(例)

(○数字は単元で育てることができる、生き方探究教育の5つの領域)

月	教科	総合的な学習 (活動例の1つ)	道徳	特別活動		
				学級活動	児童会・クラブ活動・行事	進路関係
4	技家「消費と環境」①②④⑤ 体育「体つり」①②	【修学旅行へ向けて】 ①②③④⑤	集団生活の向上②③ 望ましい生活習慣①③	3年生ひいて①②③⑤ 学級委員を選出しよう①⑤	入学式・始業式①②③ 新入生を迎える会①②③	進路志望調査④⑤
5	美術「見え方の不思議」①②③④ 技家「マルチメディアの活用」③④	修学旅行の実施 結果をまとめてみよう	日常の礼儀① 義務の遂行③	進路決定の諸要素④⑤ 係活動を活かしよう①②	家庭訪問②③⑤ 修学旅行①②③④⑤	進路保護者会④⑤
6	数学「平方根」①④ 音楽「合唱の表現を深めよう」①②	【人権ゆかりの地をたずねて】 ①②③⑤	自己の確立③⑤ 個性の伸長①③	進学・就職状況④⑤ 生徒総会②④⑤	生徒総会①②④⑤ 教育相談①③④⑤	オープンスクール①④⑤
7	社会「個人の尊厳と日本国憲法」 ①③⑤	実際に調べに行こう 話を聞いてみよう	整理整頓⑤	社会における差別①③	懇談会①③④⑤ 大掃除①②③	進路志望調査④⑤ オープンスクール①④⑤
8	社会・理科・技家「自由研究」 ③④⑤			夏休みの過ごし方 ①②③④⑤		オープンスクール①④⑤ 体験学習・説明①④⑤
9	国語「状況に生きる挨拶」①②③ 英語「L4 将来の夢のスピーチ」④⑤	話を聞いてみよう 調べたことをまとめてみよう	集団の一員② 理想の実現③⑤	自分の進路希望を実現するために④⑤	文化祭 ①②③④⑤ 運動会①②③⑤	進路志望調査④⑤ オープンスクール①④⑤
10	理科「地球と宇宙」④⑤ 美術「暮らしや生活を彩る」①④⑤	調べたことをまとめてみよう	人間愛①③⑤ 社会連帯①②	情報活用能力を高めるために③④⑤	終業式・始業式①②③ 進路保護者会③④⑤	オープンスクール①④⑤ 進路先の調査④⑤
11	英語「L5 人に物を勧める」①② 社会「わたしたちの生活と経済」①③④⑤	意見交流	社会の秩序④⑤ 勤労の尊さ④⑤	教育相談アンケート ①③④⑤	教育相談①②④⑤ 生徒総会①②④⑤	進路志望調査④⑤ 就職者相談④⑤
12	数学「図形と相似」①④ 体育「武道・バレーボール」①②③	発表会 学習したことを形に残そう	共に生きる①②③	進路決定に向けて ①③④⑤	懇談会①③④⑤ 大掃除①②③	進路保護者会④⑤ 三者懇談会④⑤
1	社会「現代の国際社会」①②③ 国語「未来に向かって」①⑤	【卒業に向けて】 ①②③④⑤	人間の強さ①③ 家族愛②③	進路手続について④⑤ 就職・進学の準備④⑤	防災訓練①②⑤	進路確定調査④⑤ 他府県入試③④
2	理科「自然と人間」④⑤ 音楽「卒業式に向けて」①③	自分史を作ろう	働く喜び③④⑤ 理想の実現③⑤	後輩に残す言葉①③		公立高校推薦③④ 私立高校入試③④
3		まとめよう	人類愛①②⑤ 愛国心②⑤	3年間を振り返って ①③⑤	3年生を送る会①②③⑤ 卒業式①②③	公立高校受検③④ 2次入試③④

*平成18年度京都市立中学校学習計画概要版・指導要領・他を参考に作成した。各学校では独自の指導計画を作成することが望ましい。